



日本中央競馬会
特別振興資金助成事業

全日畜「SDGs」ワークショップ（鹿児島会場）

畜産DXとアニマルウェルフェアで開く経営の未来

速報レポート

- ◎ 開催日 令和7年9月4日(木曜日)
- ◎ 時間 13:00(開会)から16:00(閉会)
- ◎ 会場 鹿児島サンロイヤルホテル

令和7年12月

全 日 畜

(一般社団法人 全日本畜産経営者協会)

(目 次)

はじめに	
・ 全日畜「SDGs」ワークショップ（鹿児島会場） プログラム	1
・ 全日畜「SDGs」ワークショップ（鹿児島会場）の概要	2
・ 第一部 話題提供	4
鹿児島県における畜産の現状と課題	4
鹿児島県畜産振興課 技術主幹兼企画経営係長 川野 実 氏	
・ 第二部 事例発表	11
U-motionによるDX技術導入とアニマルウェルフェアに配慮した肉用牛生産	11
株式会社 高崎畜産 専務取締役 高崎 淳 史 氏	
捕鳥作業の自動化とアニマルウェルフェアが作る未来展望	15
江夏商事株式会社 生産部 部長代理 原園 和洋 氏	
ともに歩んできた16年がもたらしたもの	20
株式会社 秋川牧園 生産部次長 村田 洋 氏	
・ 第三部 意見交換会	28
・ 会場アンケート調査結果	34
・ 報道等	37

はじめに

私たち、畜種横断の畜産生産者の団体「全日畜」は、令和6年度から日本中央競馬会畜産振興事業の「畜産経営の持続可能な開発目標対応調査事業」を2カ年で実施しております。

この事業は、我が国の畜産においてSDGsの達成に向け、家畜生産に係る環境負荷軽減やアニマルウェルフェア（以下「AW」という。）に配慮した飼養管理の普及などに取組み、コスト低減や見える化を推進することが生産者に求められていることから、商系飼料を利用する全国・全畜種の畜産経営者を対象として、特に生産者の関心の高い畜産DX及びAWに対する取組状況を調査分析し、課題、解決方策等を明らかにすることにより、畜産経営の安定及び発展に資することを目的としております。

本書は、令和7年9月4日（木）に「畜産DXとアニマルウェルフェアで開く経営の未来」をテーマとした、全日畜「SDGs」ワークショップ（鹿児島会場）の概要を整理した「速報レポート」です。今回は、第一部で鹿児島県農政部畜産振興課の川野 実技術主幹から「鹿児島県における畜産の現状と課題」について話題提供していただき、第二部で3名の畜産経営者が実践している畜産DXの活用方法事例及びAWにも配慮した畜産経営の事例紹介、第三部では第一部の話題提供と第二部の事例紹介に対しての意見交換を行い、それらを本書に速報としてまとめました。ご覧になる方々の参考となれば幸いです。

令和7年12月

一般社団法人 全日本畜産経営者協会
(全日畜)

全日畜 SDGs ワークショップ（鹿児島会場）プログラム

1 ワークショップの概要

- ◎ 開催日 令和7年9月4日（木曜日） 13:00 ~ 16:00
◎ テーマ 畜産DXとアニマルウェルフェアで開く経営の未来
◎ 会場 鹿児島サンロイヤルホテル 2階「開聞の間」
〒890-0062 鹿児島市与次郎1丁目8番10号 TEL 099-253-2020

2 ワークショップの構成は「話題提供」「事例発表」「意見交換」の三部構成

第一部 話題提供	テーマ：鹿児島県における畜産の現状と課題	
	鹿児島県 畜産振興課 技術主幹兼企画経営係長 川野 実 様 (行政機関)	<ul style="list-style-type: none">鹿児島県の畜産の現状と課題を紹介今後の鹿児島県畜産の目指す方向性を紹介課題：鹿児島県における畜産の現状と課題
第二部 事例発表	3名の畜産経営者から実践している畜産DXと畜産AWなどの事例紹介	
	(株)高崎畜産 専務取締役 高崎 淳史 様 (肉用牛)	<ul style="list-style-type: none">鹿児島県の薩摩川内市で大規模な肉牛一貫経営を実践牛の行動管理システム U-motion 導入やアニマルウェルフェア対応による牛の生産性向上や事故防止について紹介自社ブランド牛の生産、WCS用稻の自社生産や収穫受託も紹介
	江夏商事(株) 生産部 部長代理 原園 和洋 様 (肉用鶏)	<ul style="list-style-type: none">鹿児島、宮崎・熊本県でプロイラー生産・処理・販売を経営日本で初めてアニマルウェルフェアに対応した生鳥コンテナを導入し運用開始今後、自動捕鳥機の導入と併せ捕鳥業務の省力化と更なるアニマルウェルフェアへの取組を推進
	(株)秋川牧園 生産部次長 村田 洋 様 (肉用鶏等)	<ul style="list-style-type: none">1972年創業、山口県を中心に鶏肉・卵・牛乳等を生産し、加工・宅配での販売も行う6次産業化に取組む若鳥は自然光や風が入る開放型鶏舎で飼養早くから地域循環に取組み、秋川牧園の鶏糞を良質な発酵堆肥とし、自社グループでの飼料用米生産に活用する耕畜連携を実施
第三部 意見交換	発表者と会場のみなさんと意見交換を行います	
	一般社団法人 全日本配合飼料価格畜産安定基金 常務理事 引地 和明 様 (畜産団体)	<p>ワークショップの司会・進行役を務めます 発表者と会場参加者との意見交換です 生産現場から学ぶ持続可能な畜産経営</p>

全日畜「SDGs事業」ワークショップ（鹿児島会場）の概要

開催日時 令和7年9月4日（木）13：00～16：00

開催場所 鹿児島サンロイヤルホテル 開聞の間

鹿児島市与次郎 1 丁目 8-10

テーマ 「畜産DXとアニマルウェルフェアで開く経営の未来」

参加者 鹿児島県をはじめ、宮崎県、山口県など九州・中国地域から、畜産経営者及びその関係者 23名、関係団体 10名、行政関係者 15名、飼料メーカー関係者 22名、推進委員等 4名、事務局を合せて 81名。



（鶴園全日畜理事による開会挨拶）

第一部では、鹿児島県畜産振興課川野技術主幹から、「鹿児島県における畜産の現状と課題」についての講演があった。概要是、鹿児島県の畜産部門は、肉用牛1,208億円、ブロイラー1,067億円、豚910億円、鶏卵439億円で、全国的に見ても、畜産物生産出荷量では、乳用牛とホルオースを除き、全部門で鹿児島県が全国トップを維持している。

家畜飼養動向で、肉用牛について飼養戸数は減っているものの、飼養頭数は増加している。ブロイラー飼養戸数、飼養羽数は増加し、乳用牛は減少、豚の飼養頭数は増加、採卵鶏の飼養戸数は増加したが、飼養羽数が減少している。

県の令和7年度の畜産振興対策の主な施策は、畜産生産基盤の強化や生産向上政策として畜産クラスター事業、畜産経営安定のための取組みとして牛マルキンや豚マルキン、その他、飼料自給率の向上対策、家畜衛生対策の向上と家畜防疫対策の強化、国内外向けPR・販路拡大などに取り組んでいる。昨年から流通対策係を設置し、流通面の取り組みを強化している。



（鹿児島会場）

第二部の事例発表では、3名の畜産経営者から、実践している畜産DXと畜産AWの事例紹介があった。

最初に、薩摩川内市で大規模肉牛一貫経営を実践している株式会社高崎畜産専務取締役 高崎淳史氏から、①牛の行動管理システムU-motion導入やアニマルウェルフェア対応による生産性向上や事故防止についての紹介 ②自社ブランド牛の生産、WCS用稻の自社生産や収穫受託の紹介。

続いて、鹿児島、宮崎、熊本県でブロイラーの生産・処理・販売をしている江夏商事株式会社生産部 部長代理 原園和洋氏から、①日本で初めてアニマルウェルフェアに対応した生鳥コンテナを導入して運用している状況の紹介 ②今後、自動捕鳥機の導入と合わせ捕鳥業務の省力化と更なるアニマルウェルフェアへの取り組みの紹介。

最後に、山口県を中心に鶏肉、卵、牛乳を生産し、加工・宅配で販売を行い6次化産業に取り組む株式会社秋川牧園 生産部次長 村田 洋氏から、①自然光や風の入る開放型鶏舎における若鳥の飼養 ②地域循環の取り組みとして、秋川牧園の良質な鶏ふんの発酵堆肥を自社グループで飼料用米の生産に活用する耕畜連携事例の紹介があった。

第三部では、会場参加者で意見交換を行った。会場参加の生産者の関心事であるDX・AWに対する質問、意見が生産者から多く出された。その中でも、DX・AW対応を行うとコスト増になることや、作業労働の軽減などでどのような成果が得られるのか。畜産は得てして、堆肥の問題も含めてアニマルウェルフェアにしても加害者みたいな見方をされがちだが、それを解決しようと皆さん頑張っている。現場で実践されて課題や解決方法を関係者みんなで共有すべきであり、どのように対応すべきか苦慮しているか等に関して、意見交換がなされた。

第一部 話題提供

タイトル 鹿児島県における畜産の現状と課題

提供者 鹿児島県 畜産振興課 技術主幹兼企画経営係長 川野 実 氏

[話題提供の概要]

1 鹿児島県の畜産の概要

鹿児島県の畜産部門は、令和5年度の農業総産出額 5,438 億円のうち 3,754 億円（69%）を占める。内訳は、肉用牛 1,208 億円、ブロイラー 1,067 億円、豚 910 億円、鶏卵 439 億円と続く。加工、流通部門での畜産部門の貢献も大きい。全国的に見ても、畜産生産額では、乳用牛とホル雄を除き、全部門で鹿児島県が全国トップである。



家畜飼養動向では、肉用牛について飼養戸数は減っているものの、飼養頭数は増加している。ブロイラーは飼養戸数及び飼養羽数も増加、乳用牛は減少、豚の飼養頭数は増加、採卵鶏の飼養戸数は増加したが、飼養羽数は減少している。

県の畜産振興策は、令和7年度の畜産振興を図るための主な施策として、畜産生産基盤の強化や生産性向上対策として畜産クラスター事業など、畜産経営安定のための取組みとして牛マルキンや豚マルキンなど、その他、飼料自給率の向上対策、家畜衛生対策の向上と家畜防疫対策の強化、国内外向け PR・販路拡大などに取り組んでいる。昨年、課内に流通対策係を設置し、流通面の取り組みを強化している。

2 肉用牛生産基盤強化対策

肉用牛では増頭対策を行っている。繁殖農家はこの10年間で 3,610 戸減少した。担い手では 70 歳以上が 42% と高齢化が進んでいる。肥育農家戸数は 10 年で 217 戸減少したが、令和6年度の飼養頭数は過去最高となった。優良繁殖メス牛は増頭から更新への転換を進めている。

生産基盤の強化として、繁殖雌牛の増頭推進に力を入れている。小規模・高齢化の経営継続のため、肉用牛ヘルパー、コントラクター、キャトルセンターの活用も推進し、省力化、スマート農業の導入を進めるとともに、肥育出荷月齢の 30 力月から 24 力月への短縮を目指している。

3 配合飼料高騰対策

我が国の飼料供給割合は、国産粗飼料の占める割合は 20%、濃厚飼料の輸入割合は 80% となっている。令和2年からの輸入飼料の高騰で、令和3年からの配合飼料価格安定制度の基金からの補てんが急激に増え、通常補填基金に加え異常補填基金からの補填も行われた。

県としても配合飼料価格高騰対策緊急支援事業を実施しており、令和7年度生産者積立金 800 円/t のうち 200 円/t を支援した。

未利用資源等の飼料化について、稲わらの飼料利用を促進、デンプン粕の利用、焼酎粕の利用なども進めている。現状では、県内の稲わらの利用率は 53.8% である。

飼料増産の取り組みとしては、自給飼料基盤に立脚した畜産経営を確立するため①草地等の基盤整備、②水田や耕作放棄地の活用、③コントラクター組織などを活用した飼料生産の外部化、④飼料の安全性・品質の確保推進などを実施している。自給飼料率の向上策として、地域資源フル活用飼料増産対策にも取り組んでいる。

4 畜産物の販路拡大対策

国家戦略として、輸出促進があり、鹿児島県の認定施設からの牛肉輸出にも取り組んでいる。

牛肉の輸出促進で、現状 175.2 億円の輸出額を 225 億円へ増やす目標である。令和5年度は、鹿児島県から、香港、台湾、米国の順での輸出であったが、令和6年度は、アメリカ、タイ、香港の順で輸出されている。

5 その他

最近の動きとして、畜産業の持続可能性を確保するため、環境にも経営にも優しい、「かごしま GX（グリーン・トランスフォーメーション）プロジェクト創出・推進事業」を立ち上げた。令和6年度の取り組みとして、産学官金の連携により畜産業（肉用牛・酪農）における GX を推進している。

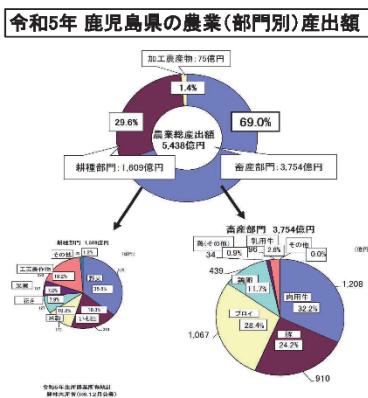
また、2024 年問題でドライバーが不足しており、地域の飼料輸送体制の維持について、ドライバーの負担軽減のため、生産者にも高所作業の負担削減、配合飼料タンク周辺の安全点検など施設の補修や整備をお願いしている。

令和7年度 全日畜 ワークショップ研修会

- 1 本県の畜産の概要
- 2 肉用牛生産基盤強化対策
- 3 配合飼料価格高騰対策
- 4 畜産物の消費・販路拡大対策
- 5 その他

令和7年9月4日（木）
鹿児島県農政部畜産振興課 企画経営係長 川野 実

1 本県の畜産の概要



1. 飼養頭数(令和6年2月1日現在、上位5県)

区分	順位	全国	県別順位					備考
			1位	2位	3位	4位	5位	
乳用牛		1,313,000	北 海 道	鹿児島県	岩手県	群馬県	新潟県	鹿児島(665) 12,000
			821,500	52,800	43,000	38,700	31,900	0.9
			62.6	4.0	3.3	2.9	2.4	
経産牛		826,200	北 海 道	鹿児島県	岩手県	群馬県	新潟県	鹿児島(550) 8,530
			488,000	39,500	30,000	23,500	22,500	1.0
			55.6	1.9	1.9	1.7	2.7	
肉用牛		2,672,000	北 海 道	鹿児島県	宮崎県	熊本県	鹿児島	
			558,500	362,700	288,200	134,000	93,500	
			20.9	13.6	9.7	5.0	3.5	
肉用種		1,897,000	鹿児島県	宮崎県	北 海 道	鹿児島	鹿児島	
			350,100	230,900	213,800	111,100	78,900	
			19.5	12.2	11.3	5.9	4.2	
肥育牛		841,600	鹿児島県	宮崎県	北 海 道	鹿児島	佐賀県	
			154,000	87,900	67,500	41,100	36,100	交配種は含まない
			18.4	14.4	10.0	6.9	4.3	
繁殖雌牛		642,400	鹿児島県	宮崎県	北 海 道	鹿児島	鹿児島	
			123,100	84,600	73,800	44,200	44,100	
			19.2	13.2	13.2	6.9	9.9	
豚		8,798,000	鹿児島県	宮崎県	鹿児島	鹿児島	鹿児島	
			752,200	721,900	610,800	580,700	580,700	育成豚を含む
			13.6	8.2	6.9	6.6	6.6	
子取り豚		758,300	鹿児島県	宮崎県	鹿児島	鹿児島	鹿児島	
			66,200	62,800	51,000	46,000	46,000	
			8.8	8.2	6.8	6.1	6.1	
採卵猪		168,598	千葉県	茨城県	鹿児島県	鹿児島	鹿児島	
			14,129	12,109	10,191	10,036	9,602	種鑑定は含まない
			8.4	7.2	6.0	6.0	5.7	
ブロイラー		144,859	鹿児島県	宮崎県	鹿児島	鹿児島	鹿児島	
			32,003	28,155	23,604	7,639	5,531	
			22.1	19.4	16.3	5.3	3.8	

資料: 森林水産省「畜産統計」、令和6年2月1日現在

2 畜産物生産出荷量(令和5年、上位5県)

区分	順位	全国	県別順位					備考
			1位	2位	3位	4位	5位	
生乳		7,299,933	北海道	栃木県	鹿児島県	群馬県	岩手県	鹿児島(176)
			4,141,645	341,645	256,330	201,616	196,506	1.0
			56.8	1.7	1.5	1.2	1.1	
肉牛		1,104,523	北海道	鹿児島県	東京都	兵庫県	福岡県	
			244,127	98,773	87,750	68,085	54,391	
			22.5	19.9	17.9	10.2	9.8	
うち和牛		506,877	鹿児島県	宮崎県	鹿児島	宮崎	鹿児島	
			84,847	66,324	46,373	38,157	31,897	
			16.7	13.1	9.2	7.5	6.3	
うち去勢		271,786	鹿児島県	宮崎県	鹿児島	宮崎	鹿児島	
			53,322	39,896	19,608	19,078	18,348	
			19.6	14.7	11.7	10.0	9.0	
うち雄		234,470	鹿児島県	宮崎県	鹿児島	宮崎	鹿児島	
			31,500	27,611	26,438	18,344	12,808	
			11.4	11.7	10.9	7.8	5.5	
豚		16,406,981	鹿児島県	北海道	青森県	茨城県	鹿児島	
			2,547,673	1,382,556	1,130,984	1,088,372	1,006,170	
			15.5	8.4	6.9	6.6	6.1	
鶏		2,437,773	鹿児島県	千葉県	茨城県	鹿児島	鹿児島	
			169,898	153,324	150,582	135,838	122,337	
			7.0	8.3	6.2	5.6	5.0	
プロイラー		73,193	鹿児島県	宮崎県	鹿児島	北 海 道	鹿児島	
			15,970	13,892	12,223	4,042	3,919	
			21.8	18.7	16.7	5.5	5.4	

資料: 森林水産省「畜産統計」、令和6年2月1日現在

*1 戸当たりの頭数

資料: 森林水産省「畜産統計」、令和6年2月1日現在

*2 プロイラーについては、H27年から「畜産流通調査」「畜産統計」「畜産頭数調査」の統合調査終了のため「畜産統計」の数値を使用

3 猪

年次	H31	R2※	R3	R4	R5	R6	(単位: 戸 千頭 千羽 %)	
							対前年比	
飼養戸数	514	481	477	452	443	387	87.4	
飼養頭数	1,269	1,289	1,234	1,199	1,153	1,200	104.1	
子取り用豚	125.7	107.1	120.2	119.2	114.3	112.3	98.3	
1戸当たりの頭数	2,468.9	2,679.6	2,587.0	2,652.7	2,602.7	3,100.8	119.1	

資料: 森林水産省「畜産統計」、令和6年2月1日現在

*1 戸当たりの頭数

資料: 森林水産省「畜産統計」、令和6年2月1日現在

*2 プロイラー

年次	H31	R2※	R3	R4	R5	R6	(単位: 戸 千頭 千羽 %)	
							対前年比	
飼養戸数	377	411	381	378	390	402	103.1	
飼養羽数	27,970	24,874	27,085	28,090	31,285	32,003	102.3	
1戸当たりの羽数	74,191	60,522	71,089	74,312	80,218	79,509	99.2	

資料: 森林水産省「畜産統計」、令和6年2月1日現在

*1 戸当たりの羽数

資料: 森林水産省「畜産統計」、令和6年2月1日現在

*2 プロイラー

畜産振興を図るための主な施策（令和7年度）

1 畜産生産基盤の強化や生産性の向上

- 畜産クラスター事業
- 乳用牛成育牛確保支援事業
- 持続可能な酪農振興対策事業
- 鹿児島県酪農生産基盤強化緊急支援事業
- 第5系統豚造試験



2 畜産経営安定のための取組

- 畜産経営技術高度化促進事業
- 畜産特別資金利子補給事業
- 肉用牛牛価格安定対策事業
- 肥育牛牛価格安定対策事業（牛マルキン）
- 肉豚価格安定対策事業（豚マルキン）
- 鶏卵価格安定対策事業
- ブロイラー価格安定対策事業
- 配合飼料価格高騰に対する緊急支援事業



生産基盤の強化対策（小規模・高齢農家の経営継続）

- 育苗負担軽減のため、肉用牛ヘルバーやコントラクター、キャトルセンター（子牛預託施設）等の活用を推進
- 畜産組合の増頭のため、低成本簡易牛舎の整備を支援

肉用牛ヘルバーの活用推進

- ☆ 肉用牛ヘルバーの組織化や受托作業を実現
- ☆ 伐採作業等の1/2以内を請成
- ☆ 施設作業（耕耙整地、セキリ市出荷、販売等）
- ☆ ②相談（A、市町村）

コントラクターの育成強化

- ☆ コントラクターの候補者育成に向けた取組を実施
- ☆ 施設作業（耕耙整地の作物栽培・収穫、施肥整地など）
- ☆ 37軒（若林田畠、農業公社等）

キャトルセンターの活用推進

- ☆ キャトルセンター（子牛を生後3ヶ月からセリ市出荷まで育成する施設）の活用を推進
- ☆ 施設作業（耕耙整地の作物栽培・収穫、施肥整地など）
- ☆ 10施設

低コスト簡易牛舎の整備

- ☆ 牛舎を既存に必要な面積牛舎へと器具材を転用し、最適な貯蔵場所を確保する場合に特に効果的
- ☆ 牛舎（青島牛舎司）1/2以内で助成2.5万円/m²（青島牛舎司）
- ☆ 器具材（1/2以内（約10m）、遮風等）

生産基盤の強化対策（省力化・スマート農業の推進）

- 平成31年3月、本県農業の持続的発展に向け、スマート農業の将来像を明確にした上で、現地の実装例に向けた取組を進めるため、「鹿児島県スマート農業推進方針」を策定
- 本県が目指す、スマート農業の将来像の5柱として「超省力・高生産畜産經營の実現」を位置付け、省力化とデータ活用による生産性向上で畜産経営の規模拡大へ貢献を図る。

鹿児島県におけるスマート農業の実例

主な農業分野別スマート農業の取り組み

1. 農業機械化による省力化
 - ・機械化率の向上による省力化（機械化率：機械化率は、機械化率の割合を示す。機械化率の高い機械化率ほど、多忙な日々の農作業をより簡単にこなせるようになります。）
 - ・機械化率の高い機械化率による省力化
2. 農業機械化による省力化
 - ・機械化率の高い機械化率による省力化（機械化率：機械化率は、機械化率の割合を示す。機械化率の高い機械化率ほど、多忙な日々の農作業をより簡単にこなせるようになります。）
 - ・機械化率の高い機械化率による省力化
3. 農業機械化による省力化
 - ・機械化率の高い機械化率による省力化（機械化率：機械化率は、機械化率の割合を示す。機械化率の高い機械化率ほど、多忙な日々の農作業をより簡単にこなせるようになります。）
 - ・機械化率の高い機械化率による省力化
4. 中山間地域等の畜産本拠地における畜産機器の実証実験
 - ・中山間地域等の畜産本拠地における畜産機器の実証実験（中山間地域等の畜産本拠地における畜産機器の実証実験）
5. ペーパーレス農業の実現
 - ・ペーパーレス農業の実現（ペーパーレス農業）

繁殖母牛20頭以上の飼養農家におけるスマート農業の取組状況

年	頭数 (20頭)	面積 (ha)	年間 生産量 (kg)	年間 販売額 (億円)
R3.1	63	113	423	1.25
R4.1	65	127	510	1.52
R5.1	70	134	512	1.60
R6.1	73	143	674	2.05
R7.1	73	154	694	2.05

その他（生産性向上対策）

牛の商品性向上

- 「子牛育成料給与マニュアル」（市場出荷日齢の短縮）

出荷日齢	HG(肥育)	NG(肥育)	日数
275	503	512	19

肥育出荷年齢の短縮

- 「黒毛和種去勢肥育牛の短期肥育マニュアル」（出荷月齢の短縮：豚肉近25ヶ月齢→24ヶ月齢出荷）

畜産衛生対策の強化

- 家畜伝染病の侵入防止対策

子牛の下痢予防プログラム

3 配合飼料高騰対策

畜種別の経営と飼料

- 牧牛の今と5年度（概算）の畜産における飼料供給割合は、主に国産が占める粗飼料が20%、輸入が占める廉価飼料が80%（TONベース）となっている。
- 純利潤が畜産経営コストに占める割合は高く、粗飼料の舵りが多いことで4~6割、農産物中心の豚・鶏で6~7割。

粗飼料と廉価飼料の割合(TONベース)

畜種別の構成(R5年)

畜種	繁殖牛 (子牛生)	肥育牛	生乳	肥育豚	ブタ・鶏	養鶏
北薩	33%	4%	56%	56%	59%	67%
肥育牛	41%	55%	42%	43%	42%	42%
肥育豚	19%	81%	1%	1%	1%	1%
鶏	1%	1%	1%	1%	1%	1%

粗飼料と廉価飼料の割合(R5年)

畜種	繁殖牛 (子牛生)	肥育牛	生乳	肥育豚	ブタ・鶏	養鶏
北薩	44%	40%	56%	67%	59%	67%
肥育牛	41%	55%	42%	43%	42%	42%
肥育豚	19%	81%	1%	1%	1%	1%
鶏	1%	1%	1%	1%	1%	1%

資料：農林水産省「畜産統計年報」、農業生産統計年報（農業生産統計年報）および「令和元年農業政策動向調査結果」、農業生産統計年報（農業生産統計年報）

配合飼料価格の推移と補填金交付状況

※R2年度第2四半期～R7年度第2四半期の間に配合飼料価格（メーカー標準）から輸入原価料價格へ変更。
※R2年と比較し、R7年の畜産負担額は約4倍で高止まり。

配合飼料価格安定制度の概要

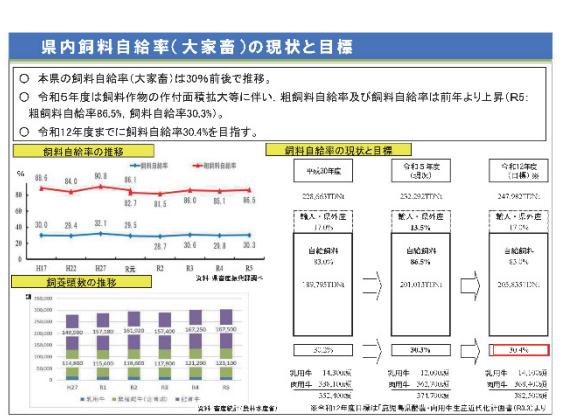
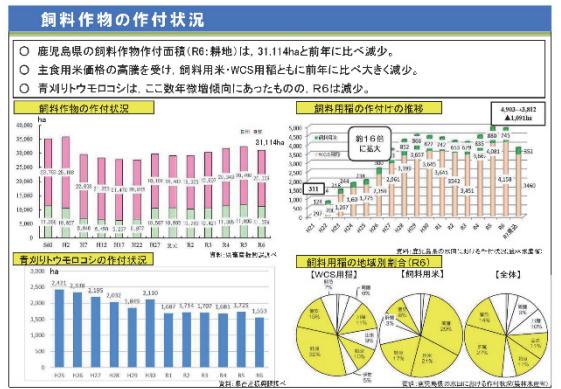
- 配合飼料価格安定制度は、配合飼料価格の上昇が畜産業に及ぼす影響を緩和するため、民間（生産者）と配合飼料メーカーとの協立によって通常補填と、異常価格高騰時に異常補填と呼ばれる異常補填制度が実施されている。
- 平成25年12月に制度を実施し、通常補填と、異常価格高騰時に異常補填と呼ばれる異常補填制度が実施され、令和4年度第1四半期（1～3月）に2回目（通常補填）と、令和4年度第2四半期（4～6月）においても通常補填が実施するとともに、8月ぶりに異常補填が実施して以降、令和4年度第4四半期（1～3月）まで連続して通常補填、異常補填とともに実施。
- この補填財源のため、令和4年度正予算において異常補填基金への230億円の積増しを措置するとともに、令和4年度4月の下書き費において430億円、令和4年度第2次補正予算で103億円の積増しを措置。
- 令和5年度第1四半期以降の対策として、飼料コストの急激な変動に耐えるための緊急補填（新たな特例）を制度内に設け、必要な財源を活用し、令和5年度第1四半期（4～6月）、第2四半期（7～9月）、第3四半期（10～12月）に緊急補填が実施。
- 制度の基本的な仕組み

※R2年と比較し、R7年の畜産負担額は約4倍で高止まり。

配合飼料価格安定制度に基づく価格差補填の実施状況

年度	四半期	異常補填		通常補填		緊急補填	
		単価	総額	単価	総額	単価	総額
R2	1	-	-	-	-	-	-
	2	-	-	-	-	-	-
	3	-	-	-	-	-	-
	4	-	-	3,300	176	-	-
R3	1	5,901	326	3,999	221	-	-
	2	7,266	394	4,934	267	-	-
	3	4,128	239	4,372	253	-	-
	4	1,749	96	3,451	190	-	-
R4	1	4,761	269	5,039	285	-	-
	2	11,346	617	5,454	296	-	-
	3	496	29	7,254	423	-	-
	4	327	18	623	34	-	-
R5	1	-	-	-	-	7,050	392
	2	-	-	-	-	5,250	282
	3	-	-	-	-	1,050	61
	4	-	-	-	-	-	-
R6	1	R2年第4四半期以降の配合飼料価格が4,800億円以上の補填金が交付された。					
	2	R2年第4四半期以降の配合飼料価格が4,800億円以上の補填金が交付された。					
	3	R2年第4四半期以降の配合飼料価格が4,800億円以上の補填金が交付された。					
	4	R2年第4四半期以降の配合飼料価格が4,800億円以上の補填金が交付された。					

（単位：円/トン、億円）



```

graph TD
    A["○飼料増産に向けた取組について"] --> B["○飼料生産基盤の確立"]
    A --> C["○飼料を活用した畜産経営の生産・利用拡大"]
    A --> D["○飼料の安全性・品質の確保推進"]
    B --> E["自給飼料に立脚した畜産経営の確立"]
    C --> E
    D --> E
    E --> F["○飼料生産の外部化推進"]
    E --> G["○飼料生産の内部化"]
    E --> H["○飼料の安全性・品質の確保推進"]
    F --> I["コンタラクター等飼料生産支援組織の育成や活動強化"]
    F --> J["TMRセンターの設立支援"]
    G --> K["草地や飼料畠等の飼料生産基盤の造成・整備"]
    G --> L["優良品種の選育・耕作放棄地、水田、公共牧場等の活用"]
    G --> M["高齢農夫飼料や二毛作による効率的な生産"]
    H --> N["WCS用種・飼料用米等の導入"]
    H --> O["WCS用種・飼料用米等の導入"]
    H --> P["トウモロコシ等の作付拡大"]
    H --> Q["水田農業や耕作放棄地の活用"]
    I --> R["コンタラクター"]
    J --> S["TMRセンター"]
    K --> T["草地等の飼料生産基盤の造成"]
    L --> U["耕作放棄地等の活用"]
    M --> V["二毛作による効率的な生産"]
    N --> W["WCS用種"]
    O --> X["WCS用種"]
    P --> Y["トウモロコシ"]
    Q --> Z["水田農業"]
    R --> AA["コンタラクター"]
    S --> AB["TMRセンター"]
    T --> AC["草地等の飼料生産基盤の造成"]
    U --> AD["耕作放棄地等の活用"]
    V --> AE["二毛作による効率的な生産"]
    W --> AF["WCS用種"]
    X --> AG["WCS用種"]
    Y --> AH["トウモロコシ"]
    Z --> AI["水田農業"]

```

飼料増産に向けた取組について

- 飼料生産基盤の確立
 - ・ 草地や飼料畠等の飼料生産基盤の造成・整備
 - ・ 優良品種の選育・耕作放棄地、水田、公共牧場等の活用
 - ・ 高齢農夫飼料や二毛作・二期作による効率的な生産
- 飼料を活用した畜産経営の生産・利用拡大
 - ・ 飼料用稻（WCS用稻・飼料用米）や優らわの生産・利用の拡大
 - ・ トウモロコシ等の作付拡大
 - ・ 水田農業や耕作放棄地の活用
- 飼料の安全性・品質の確保推進
 - ・ 高齢農家や飼料販売業者等への調査・排摸
 - ・ 優良品種の栽培試験や飼料分析を通じた飼料・栽培指導を推進

自給飼料に立脚した畜産経営の確立

○飼料生産の外部化推進

- ・ コンタラクター等飼料生産支援組織の育成や活動強化
- ・ TMRセンターの設立支援

○飼料生産の内部化

- ・ 草地や飼料畠等の飼料生産基盤の造成・整備
- ・ 優良品種の選育・耕作放棄地、水田、公共牧場等の活用
- ・ 高齢農夫飼料や二毛作による効率的な生産

○飼料の安全性・品質の確保推進

- ・ 高齢農家や飼料販売業者等への調査・排摸
- ・ 優良品種の栽培試験や飼料分析を通じた飼料・栽培指導を推進



地域資源フル活用飼料増産対策事業について

○ 県単独の「地域資源フル活用飼料増産対策事業」により、飼料作物の生産拡大や飼料生産組織の育成など目標飼料の増産に向けた取組を支援。

事業概要

地域の実情に応じた目標飼料増産の取組	飼料生産組織の育成・活動強化策																
<p>・県境越えや市内に向けた栽培促進(主に沼垂町、足利市、足利市)</p> <p>飼料作物の生産拡大による収益向上等、地元の生産者による取組実績</p> 	<p>・麦秆青刈機直火への取組 総耕地面積：7,800ha(10ha)</p> <p>・飼料作物の生産化や麦茎社について既存拡大型取組</p> 																
<p>・野生動物による飼料作物の食害対策(主に鹿、1,120ha)</p> <p>作物に対する野生動物被害防止対策として、地元の生産者による取組実績の報告</p> 	<p>・主幹トヨコロコン培養に向けた収穫実績(主に鹿)</p> <p>・飼料用米糠粉投入による取組実績</p> 																
<p>・飼料作物の栽培面積拡大推進(主に鹿)</p> <p>立派な農場で栽培した高粱で牛馬を育てた</p> 	<p>・高粱茎葉飼料への販売面積拡大(鹿草平、宍戸)</p> <p>高粱茎葉飼料用トヨコロコン・リカルカへの販賣に係る取組実績を示す</p> 																
<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="text-align: left; padding: 2px;">種類</th> <th style="text-align: center; padding: 2px;">面積(ha)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>ソバ</td> <td style="text-align: center; padding: 2px;">250ha</td> </tr> <tr> <td>トウモロコシ</td> <td style="text-align: center; padding: 2px;">3,000ha</td> </tr> <tr> <td>2-3年草</td> <td style="text-align: center; padding: 2px;">2,200ha</td> </tr> <tr> <td>サツマイモ</td> <td style="text-align: center; padding: 2px;">2,300ha</td> </tr> </tbody> </table>	種類	面積(ha)	ソバ	250ha	トウモロコシ	3,000ha	2-3年草	2,200ha	サツマイモ	2,300ha	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="text-align: left; padding: 2px;">種類</th> <th style="text-align: center; padding: 2px;">面積(ha)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>ソバ</td> <td style="text-align: center; padding: 2px;">2,600ha</td> </tr> <tr> <td>トヨコロコン</td> <td style="text-align: center; padding: 2px;">5,900ha</td> </tr> </tbody> </table>	種類	面積(ha)	ソバ	2,600ha	トヨコロコン	5,900ha
種類	面積(ha)																
ソバ	250ha																
トウモロコシ	3,000ha																
2-3年草	2,200ha																
サツマイモ	2,300ha																
種類	面積(ha)																
ソバ	2,600ha																
トヨコロコン	5,900ha																
畜産組合会への貼紙																	

4 畜産物の販路拡大対策

第二部 事例発表

タイトル U-motion による DX 技術導入とアニマルウェルフェアに配慮した肉用牛生産
提供者 株式会社 高崎畜産 専務取締役 高崎 淳史 氏

[話題提供の概要]

1 経営概要

鹿児島県薩摩川内市において、法人組織により黒毛和牛の繁殖・肥育一貫経営及び主食用米、稻 WCS、加工用米の生産、利用、販売を行う耕畜の複合経営体である。経営は、グループ会社の肉用牛生産を担う（株）高崎ファーム、飼料の仕入れ販売を担う（株）MMKとの連携で進めている。家畜飼養頭数は、黒毛繁殖和牛 356 頭、肥育牛等 2,634 頭である。グループ会社の高崎ファームは、4,060 頭の肥育牛を飼養しており、グループ全体では 7,000 頭を飼養している。



（株）高崎畜産は、2007 年（平成 19 年）に経営を開始し、薩摩川内市の 3 力所に農場を有す。現在社員数は 20 名、うち農業班従事員数 7 名である。水田、飼料生産基盤の経営面積は、主食用米 4ha。加工用米 52ha、WCS 用稻 22ha、刈取り委託作業 47ha である。

「北さつま高崎牛」、鹿児島黒毛和牛「西郷（せご）どん牛」、「鹿児島黒牛」の自社ブランド牛を出荷し、これまで全国枝肉共励会「優良賞」など受賞実績は多数となっている。（令和 7 年 7 月 7 日）777 のおめでたい七夕の日に福岡食肉市場にて開催された「サマーミートフェア 2025」において、最優秀賞を獲得した。

2 畜産 DX とアニマルウェルフェア（AW）の取り組み

畜産 DX 技術として、令和 5 年にデザミスの U-motion を導入し、牛の健康状態・採食状態を確認、個体に応じた対応を実施している。U-motion では、首、耳に送信機を取り付け、データ送信、サーバー処理し、利用者は PC、タブレット、スマホからサーバーへアクセスしてアラートやデータ、グラフを受信する。

個体のモニタリング項目は、動態、横臥、起立反芻、横臥反芻、起立静止、採食の 6 項目である。加速度センサーで牛の動き、気圧センサーで牛の高さを検知する。

繁殖牛の発情、分娩兆候を把握でき、繁殖成績の向上が期待できる。肥育牛については、疾病の発生、起立困難等による事故を防ぐことが可能。

U-motion は令和 4 年クラスター事業を申請し導入。今後、増頭しているので、令和 7 年度更にクラスター事業で導入予定。

U-motion の導入による効果としては、①繁殖牛においては、授精のタイミングが可視化され、分娩間隔の短縮や繁殖成績の向上、②肥育牛においては、起立不能がアラートで知らされることにより、従業員の家畜管理作業が軽減され、事故率も 0.5%程度と低くなっている。従業員の繁殖に対する管理意識の向上につながった。

DX 技術導入の課題としては、ハード、ソフトともイニシャルコスト、維持管理コスト共に高いこと、DX 技術は、操作手順が高齢者や機械に不慣れな人間には難しいことなどがある。このため、他のシステムとの連携等による簡便化が必要。また、導入には国などからの助成があると助かる。

AW の取り組みとして、①各農場を清潔に保ち、ふわふわのオガコを引き詰めている、②各牛舎の天井には何台もの大型扇風機を配置し、牛房の床を乾燥させ清潔を保っている、③暑さ対策として、各牛舎の天井にはミストの散布機、屋根への細霧装置を設置し、ストレス軽減を目指している。

AW の取り組みによる効果としては、疾病や事故の発生が減少したことが挙げられる。AW の取り組みは、牛肉の海外輸出にもつながると考えているので、現在取り組んでいる体制を継続したい。

家畜飼養管理は作業従事者の目視・確認等を徹底することを基本とし、畜産 DX による家畜の生産管理や作業従事者の労働環境をよりよくすることにつながる。これにより、生産性の向上を図ることが出来ると考えている。

3 その他

地域資源の利活用に配慮して、堆肥舎では 10 日に 1 度は攪拌し、発酵菌を入れてバイオ技術を駆使して消臭対策を行い環境保全には万全を期している。堆肥は輸出もしている。

**全日畜ワークショップ
鹿児島会場**

U-motionによるDX技術導入とアニマルウェルフェアに配慮した肉用牛生産

北さつま高崎牛

西郷(せご)どん牛

高崎川内市

2025年9月4日
株式会社 高崎畜産
専務取締役 高崎 淳史

経営概要

設立 2007年(平成19年)5月9日
社員数 20名 令和8年6月1日

事業内容 黒毛和牛繁殖	356頭
黒毛和牛肥育等	2,634頭
主食用米 (4.46ha)	
加工用米 (52.00ha)	
WCS用稻 (22.15ha)	
刈取委託作業 (47.38ha)	

グループ会社
株式会社 高崎ファーム
株式会社 MOX

主な受賞歴

出展日	出展共創会・研究会・共進会等	市場等
H22.11.18 ³	平成25年度九州肉牛研究会冬季核肉共励会 ³	福岡食肉市場・グランドチャレンジオーブン
H27.11.16 ³	平成27年度九州研究会冬季核肉共励会 ³	福岡食肉市場・グランドチャレンジオーブン
H28.07.11 ³	平成28年度九州肉牛研究会夏季核肉共励会 ³	福岡食肉市場・グランドチャレンジオーブン、最優秀賞
R2.04.02 ³	令和2年度開催記念ミートフェア ³	福岡食肉市場・最優秀賞
R2.04.21 ³	第92回出荷者組合共励会 ³	福岡食肉市場・金賞、最優秀賞
R2.07.06 ³	サマーミートフェア2020 ³	福岡食肉市場・最優秀賞
R1.07.28 ³	第93回出荷者組合共励会 ³	福岡食肉市場・金賞、最優秀賞
R2.11.10 ³	令和2年度九州肉牛研究会冬季核肉共励会 ³	福岡食肉市場・金賞
R2.11.24 ³	第94回出荷者組合共励会 ³	福岡食肉市場・金賞
R4.07.26 ³	第99回出荷者組合共励会 ³	福岡食肉市場・金賞
R4.11.22 ³	第100回肉牛出荷者組合核肉共励会 ³	福岡食肉市場・最優
R4.12.14 ³	令和4年度神戸市農業共進会冬季核肉共進会 ³	神戸市姫路西部市場・最優秀賞
R5.10.20 ³	第14回神戸市西部市場銘柄牛と牛共進会 ³	神戸市姫路西部市場・最優秀賞
R7.07.07 ³	サマーミートフェア2025 ³	福岡食肉市場・最優秀賞

(株)高崎畜産農場

(株)高崎畜産農場

スプリンクラー設置

細霧装置

(株)高崎ファーム農場

高崎牛ファーム

黒毛和牛育牛 3,992頭

良質堆肥の生産及び海外輸出

堆肥製造工程

- 1・牛糞より堆肥搬出作業
- 2・牛糞へおが屑搬入作業
- 3・堆肥合へ搬入
- 4・堆肥搬出作業

10日に1回搬出作業を行っております。
毎日ブリーフィングを行います(現地会員)、
並んで各部門で連携を取っています。

海外輸出 ラオス、カンボジア、ミャンマー、ベトナム

フレコン出荷

ラオス カンボジア

水田活用による自給飼料確保

年度別作付面積	WCS 作付面積	主食用米作付面積	加工用米作付面積	飼料用米作付面積	刈取牧草面積	計
令和2年	11.00ha ^{a2}	8.70ha ^{a2}	39.60ha ^{a2}	42.00ha ^{a2}	47.20ha ^{a2}	106.50ha ^{a2}
令和3年	11.67ha ^{a2}	7.50ha ^{a2}	45.40ha ^{a2}	1.80ha ^{a2}	42.30ha ^{a2}	108.67ha ^{a2}
令和4年	10.81ha ^{a2}	7.50ha ^{a2}	45.40ha ^{a2}	1.80ha ^{a2}	43.50ha ^{a2}	108.01ha ^{a2}
令和5年	20.77ha ^{a2}	5.10ha ^{a2}	49.55ha ^{a2}	0 ^{a2}	45.50ha ^{a2}	120.92ha ^{a2}
令和6年	21.79ha ^{a2}	5.10ha ^{a2}	52.25ha ^{a2}	0 ^{a2}	47.38ha ^{a2}	126.51ha ^{a2}

令和6年度までの盈余をお願いします^{a2}

農業生産農家	6月	7月	8月	9月	10月~11月	12月
畜生き(約)1,000頭	建設費 ^{a2}	水管理 ^{a2}	水管理 ^{a2}	WS 利用料 ^{a2}	主食用米用料 ^{a2}	施肥料 ^{a2}
畜生料 ^{a2}	田畠 ^{a2}	除草剤散布 ^{a2}	除草 ^{a2}	ロールラッパ作業 ^{a2}	加工用米用料 ^{a2}	施肥 ^{a2}
堆肥散布 ^{a2}	除草 ^{a2}	除草 ^{a2}	除草 ^{a2}	施肥 ^{a2}	堆肥散布 ^{a2}	施肥 ^{a2}
耕耙 ^{a2}	耕耙 ^{a2}	耕耙 ^{a2}	耕耙 ^{a2}	耕耙 ^{a2}	耕耙 ^{a2}	耕耙 ^{a2}

農業生産農家 7名^{a2}
WCS 用耕生産農家より取り扱いの委託請負し WCS を供給して頂き自社で WCS を消費している。^{a2}
11月 12月に WCS 用耕生産農家へ自社堆肥の供給数をしています。^{a2}
自社堆肥の消費を促すとともに、WCS 及び主食用米生産農家へ堆肥を供給することにより化学肥料の購入の抑制にも繋がり経費を削減することができました。^{a2}
自社の廻場には化学肥料を入れることは一切しません。^{a2}

DX技術の導入・AWの取り組み

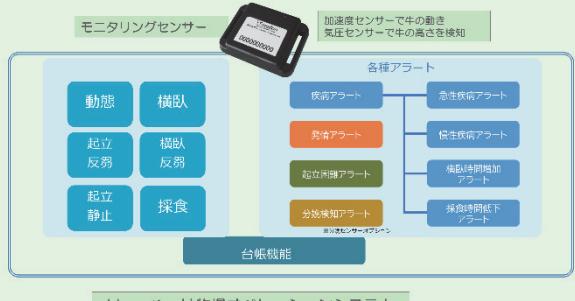
- DX技術として、牛の行動管理システム U-motionの導入による繁殖・肥育成績の向上・事故防止対策



- AWの取り組みとして、農場を常に清潔に保ち、大型換気扇や細霧装置等の導入により畜舎の温度管理、特に暑熱対策を行い、肉用牛のストレス軽減と損耗防止対策に取り組んでいます

畜産DX(U-motion)の導入

畜産DX(U-motion)の導入



畜産DX(U-motion)の導入

U-motionで見ることのできるデータ(一例)

畜産DXの取り組み状況

- 畜産DXの技術として、令和5年からU-motionを導入し、繁殖牛・肥育牛に装着。繁殖牛においては、発情・分娩兆候を把握できることで繁殖成績の向上に取り組んでいる。肥育牛については、疾病・起立困難等による事故防止対策に取り組んでいる。
- U-motionは令和4年度畜産クラスター事業により導入。さらに増頭分に対し令和7年度同事業で導入予定。

畜産DX・AWの取り組み成果

- 繁殖牛においては、授精のタイミングが可視化され分娩間隔の短縮や繁殖成績が向上
- 肥育牛においては、起立困難牛をアラートで知らせることで事故防止や従業員の管理作業が軽減
令和6年度起立困難牛の確認回数 123回
うちアラートお知らせ回数 95回
肥育牛の事故頭数 12頭 (事故率0.5%)
- 従業員の繁殖に対する管理意識が向上
- AWの取り組みにより、疾病及び事故の発生が減少

畜産DX・AWの取り組みの課題

- 畜産DXはハード、ソフトとも初期コスト、維持管理コストともが高く経営を圧迫。
- 畜産DX技術は、操作手順が高齢者や機械に不慣れな人間には難しいため、他のシステムとの連携等による簡便化が必要。
- AWは基本的に現在取り組んでいる体制を継続し、加えて、海外輸出に向けたAWの要件等にも対応していく。
- 飼養管理は作業従事者の目視・確認等を徹底することを基本とし、畜産DXによる家畜の生産管理や作業従事者の労働環境をより改善することで、生産性の向上を図ることが必要である。

タイトル 捕鳥作業の自動化とアニマルウェルフェアが作る未来展望

提供者 江夏商事株式会社 生産部部長代理 原園 和洋 氏

[話題提供の概要]

1 経営概要

江夏商事ホールディングの傘下にある法人組織で、宮崎市を拠点にブロイラーの生産・販売、及び飼料の販売を手掛ける。江夏商事ホールディング（株）の傘下には、「江夏商事（株）（宮崎県）：ブロイラーア生産、鶏肉・加工品販売」、「宮崎サンフーズ（株）（宮崎県）：食鳥処理、加工」、「鹿児島サンフーズ（株）（鹿児島県）：ブロイラーア生産、食鳥処理」、「ひなたライン（株）（鹿児島県）：飼料・生鳥・鶏肉運搬」、及び「センターフーズ（株）（鹿児島県）：鶏肉加工」がある。グループ内で宮崎と鹿児島の2県に処理場拠点を作ることで、南海トラフ、鳥インフルエンザのリスクを回避している。1日の処理羽数は6.7万羽で、将来は8.8万羽に増産する計画である。ヒナ、飼料を外部購入するほかは、すべてグループ内で生産・加工し、販売している。



1900年（明治33年）江夏芳太郎が宮崎市都城市倉の馬場にて米穀・荒物・雑貨商を創業。
1968年（昭和48年）江夏産業（株）を立ち上げ、養鶏業を開始した。2018年（平成30年）に養豚事業を移譲後、養鶏事業に特化し業務を行っている。

2 捕鳥作業の自動化とアニマルウェルフェアの取り組み

2020年10月よりコンテナによる捕鳥を実施し、捕鳥作業の省力化を推進している。今後、更なる省力化を目指し、自動捕鳥機「Apollo Compact Pro」の導入を計画中。自動捕鳥機・コンテナ捕鳥により、作業者の負担軽減だけでなく鶏へのストレス低減によるAWを同時に実現。

1) 取り組んだ動機

生産部門では、育種改良による出荷日齢の短縮や飼養管理の機械化により、生産羽数は増加している。しかし、捕鳥・運搬段階で、力ゴ捕鳥による重労働のため人手不足が生じ、日当たり捕鳥羽数が減少し生産増に追いついていない。また処理・加工部門では、処理能力は増加したが、捕鳥羽数が確保できないため、実稼働が制限されていた。

また、力ゴ捕鳥は、6～7羽/箱（約25kg）で搭載車1台当たり378力ゴ積むが、捕鳥した力ゴを車に8段積み上げるなど、すべて手作業で重労働であった。また、重労働だけでなく、捕鳥手法にコツがあり、捕鳥技術の習得に時間を要する。このため、新規採用が厳しく採用後も離職率が高かった。ベテランの社員は高齢化し定年退職するなどやめていくことで人も捕鳥羽数も頭打ちとなり、捕鳥業務が生産事業から処理事業の発展のボトルネックとなっていた。

2) 取り組み状況

オランダ・Marel 社製の捕鳥コンテナおよび、イタリア・CMC 社のコンテナ専用フォークリフトを導入。コンテナは EU の AW の認定を受けたもので、床面通気がよく、換気ができることで、鶏のストレスの軽減が可能。コンテナ 1 台に 200 羽を入れ、輸送車に 10~12 台を載せる。

導入するにあたって、全農場の鶏舎間口や鶏舎前スペースを調査し、コンテナ運用のシミュレーションを実施。更なる省力化とアニマルウェルフェア向上のため、CMC 社製の自動捕鳥機「Apollo Compact Pro」導入を計画している。

3) 取り組みによる成果

捕鳥コンテナおよび、CMC 社のコンテナ専用フォークリフトの導入により、労働負担が軽減され、捕鳥時間も短縮した。問題点を洗い出し、改善策を講じることでコンテナ捕鳥割合を上げており、現在グループ全体で 90%以上となっている。特にさつま地区では 100%コンテナ捕鳥へ移管出来た。トラック 1 台当たりの運搬羽数は生鳥カゴに比べ若干減少したものの、コンテナを安全に運ぶため、トラックを改造（屋根を昇降）し安全に業務が出来るようにした。

こうした取り組みにより、労務省力化に伴い、社員の定着率向上につながった。

4) 今後の取り組み

CMC 社の自動捕鳥機を導入する計画である。導入により①捕鳥作業が楽になり、危険な作業が減る、②鶏の損傷を減らすという 2 つの効果が期待している。自動捕鳥機は EU で AW の認定を受けている。省力化にも寄与し、4 人で 8,000 羽/時間の捕鳥が可能となる。コンテナ捕鳥により、①働き手を限定しない、②省力化と雇用の拡大、③人と鶏の両方にやさしい AW が実現されており、さらに未来を見据え、④自動捕鳥機導入の挑戦を続ける。当社が捕鳥機の実用化を図ることで、業界全体にある捕鳥作業の問題が解決できればよいと思う。

5) 取り組みの課題など

取り組みの課題としては、農場までの取り付け道路が狭く、大型車両の通行が難しい農場がある。また、海外製品を日本仕様へアジャストさせる改造や運用方法が難しい。導入当初、国内代理店がなかったため（現在は日本代理店有り）、当社が直接、販売会社と交渉や部品購入を行っていた。また海外の商取引が煩雑であった。

6) 国等への要望等

自動捕鳥機など先進的な農業機械導入に対する支援及び地方における人材確保支援や農場までのインフラ整備の拡充をお願いしたい。

enatsu

捕鳥作業の自動化とアニマル ウェルフェアが作る未来展望

GPコンテナによる省力化実践
2025年09月04日 全日畜ワークショップ

江夏商事株式会社 生産部 原園和洋

目次

- 1 会社概要 (当社の強み)
- 2 カゴ捕鳥の課題
- 3 解決策
- 4 成果
- 5 将来展望 (自動化/展開)
- 6 まとめ

会社概要 (当社の強み)

鹿児島県・宮崎県両県に処理場・農場が分散 (疾病・災害対応)

江夏商事株式会社 (生産・鶏肉販売)

- 本社：宮崎県宮崎市
- 設立：1900年
- 代表：代表取締役会長 江夏俊太郎
代表取締役社長 岩崎和也
- 資本：1000万円
- 従業員：86名 (生産部41名)
- 体制：直営+契約農場→処理→加工・販売をグループ内で一貫管理

グループ会社

- 宮崎サンフーズ (宮崎県新富町)
- 鹿児島サンフーズ (鹿児島県出水市)
- センター・フーズ (鹿児島県いちき串木野市)
- ◆ひなたライン (鹿児島県さつま町)

会社概要

The flowchart illustrates the company's integrated operations across two prefectures:

- Production:** Hatching companies supply chicks to Jiangsha Shouji (Production Department), which also receives feed from a feed company. Jiangsha Shouji then supplies chickens to Miyazaki Sunfous (Food Processing) and Kagoshima Sunfous (Food Processing).
- Processing:** Miyazaki Sunfous processes chickens and sends them to Jiangsha Shouji (Sales Department). Jiangsha Shouji also receives chickens from Jiangsha Shouji (Production Department) and Miyazaki Sunfous.
- Processing and Processing:** Miyazaki Sunfous sends processed chickens to Jiangsha Shouji (Sales Department). Jiangsha Shouji (Sales Department) then distributes to large supermarket chains (DAISO, AEON), food processing companies, and CVS.
- Other Units:** Jiangsha Shouji (Sales Department) oversees Jiangsha Shouji First Department and Jiangsha Shouji Second Department, which handle sales to food processing companies and CVS respectively.

生産→処理過程の課題

生産
育種改良や機械化により
生産羽数増加↑

捕鳥・運搬
カゴ捕鳥による重労働の為、
捕鳥羽数は減少↓

処理・加工
処理能力↑だが、
実稼働が制限↓

カゴ捕鳥の流れ

【オレンジカゴ搭載車】

① 車両へ荷合へ (手作業)
② 駐合内へ配官・捕鳥 (手作業)
③ 溝合へ車両へ (手作業・一部機械)

捕鳥のボトルネック要因

課題

- 重労働 (重量物の移動・積卸など)
- 新規雇用が厳しい・続かない
- 既存社員の高齢化・定年
- 捕鳥技術の習得に時間を要す
- 1人当たりの捕鳥羽数

解決策 (捕鳥コンテナ紹介)

自重：360kg 集鳥200羽以上

A worker is shown using the trapping container to collect birds.

コンテナ運搬車（トランスポーター）

トキめく、HAPPYな、enatsu

(CMC社)

成果（捕鳥作業）

トキめく、HAPPYな、enatsu

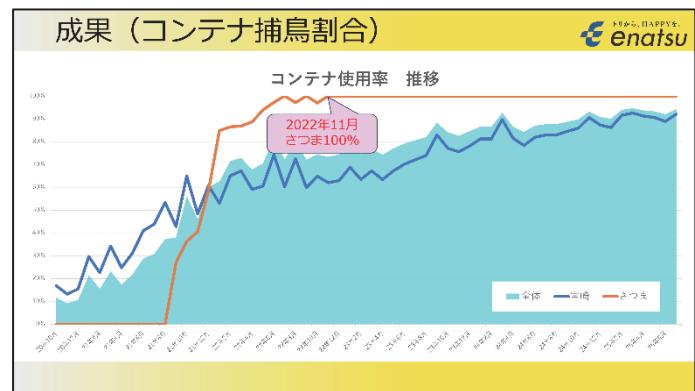
成果（カゴvsコンテナ時間比較）

トキめく、HAPPYな、enatsu

合計7時間

作業時間が2時間短縮

合計5時間



取組み（トラック当りの羽数）

トキめく、HAPPYな、enatsu

7羽詰め/カゴ	生鳥カゴ	GPコンテナ	カゴ/コンテナ率
	5kg/カゴ	360kg/Ct	
大型トラック (20 t 未満)	2,646羽	2,160羽	27羽×8段×10Ct 81.6%
	10,225kg	10,404kg	101.8%
大型トラック (20 t 超)	2,835羽	2,400羽	25羽×8段×12Ct 84.7%
	10,955kg	11,880kg	108.4%

6羽詰め/カゴ	生鳥カゴ	GPコンテナ	割合
	5kg/カゴ	360kg/Ct	
大型トラック (20 t 未満)	2,268羽	2,160羽	27羽×8段×10Ct 95.2%
	9,034kg	10,404kg	115.2%
大型トラック (20 t 超)	2,430羽	2,400羽	25羽×8段×12Ct 98.8%
	9,680kg	11,880kg	122.7%

※積載重量は車種によって異なります



将来展望（自動捕鳥機の導入）

トキから、HAPPYな
enatsu

自動捕鳥機（アポロコンパクトプロ）



鶏舎用フォークリフト（アジャイル）

将来展望（自動捕鳥機の導入）

トキから、HAPPYな
enatsu



CMC INDUSTRIES

Leading in Load Solutions



viale S. Pertini 06, 25046 Cazzago SM. (BS) ITALY

www.cmcindustries.com - info@cmcindustries.com

www.youtube.com/user/cmcmcalabria
© 2013 CMC Industries s.r.l. - all rights reserved

まとめ

トキから、HAPPYな
enatsu

- ① 働き手を限定しない、省力化と雇用の拡大
- ② 人と鶏、両方にやさしいアニマルウェルフェア
- ③ 未来を見据えた自動捕鳥機の挑戦

まとめ

トキから、HAPPYな
enatsu



タイトル ともに歩んできた 16 年がもたらしたもの
～飼料用米生産者グループと秋川牧園～
提供者 株式会社秋川牧園 生産部次長 村田 洋 氏

[話題提供の概要]

1 経営概要

(株) 秋川牧園は山口市仁保下郷に本部を置く。山口県を中心に、中国・九州地方の専用農場で、鶏肉、卵、牛乳、野菜など様々な生産物を生産し、自ら加工し、販売まで手掛ける農業生産企業である。生産から販売まで、(株) 秋川牧園がネットワークのセンターとして高度に機能分担している。ネットワーク化販売先は、グリーンコープや首都圏の生活クラブなどの生協が主体。宅配による販売も多い。連結子会社として、若鶏の一次処理を担う(株) チキン食品、若鳥の飼育を担う(株) 菊川農場、採卵鶏の飼育を担う(有) 篠目三谷、乳牛の飼育を担当する(有) むつみ牧場、栽培時に農薬や化学肥料を使わない野菜生産及び自給飼料の生産を担当する(株) ゆめファームがある。



1972 年創業。社長の祖父が 1932 年に中国大連郊外に秋川農園を創設したのがはじまり。「口に入れるものは間違ってはいけない」という理念のもと、食鳥、採卵鶏、乳牛、野菜生産、自給飼料の生産、生産物の加工、全国へ宅配を行っている。野菜は無農薬、無化学肥料で生産している。

従業員数は、正社員 320 名（令和 6 年 1 月現在）、パートを含めると総数約 480 名になる。家畜・家禽の飼養羽数は、肉用鶏 210 万羽、採卵鶏 11 万羽、乳用牛成牛 60 頭である。経営面積は、飼料用米委託 生産者グループの水田作付け総面積は 170ha、WCS 用稻は 2ha の作付け、野菜畠は 10.6ha である。

2 畜産 DX とアニマルウェルフェア(AW)の取り組み

肉、豚肉、牛肉、牛乳、鶏卵、野菜を生産と加工、販売の品質管理、技術開発、販売などの役割については、組織の要である(株) 秋川牧園がネットワークのセンターとして高度に機能分担しネットワーク化による管理。

農場の IT 化（餌残量瘦測定装置など）、ペーパレス化で農場管理の労働力節減化を図っている。AW の取り組みは、肉用鶏は、日光が注ぎ込む開放型鶏舎で自由に運動しながらのびのびと過ごせる方式で飼養。採卵鶏は、平飼いで AW に配慮した飼養方式を採用。鶏舎は平飼い方式を増設している。

取り組みの背景としては、肉用鶏は、飼料用米の給与、開放鶏舎で AW に配慮した飼養管理方式を採用しているが、これは取引先の生協からの提案もあった。

3 飼料用米の生産による地域循環型経営を実現

2009 年から飼料用米と鶏ふん堆肥の循環に取り組み、これまで 16 年経過した。多収品種に取り組み、現在はモミ米で 1,000 kg/10 a の収量を実現している。

飼料用米の取り組みでは、最初から飼料用米の圃場視察会を行った。これは、飼料用米生産に参加する農家を引き連れて、圃場を視察し、生育状況を調査し、農家同士で意見交換し、生産技術を高める活動で、現在まで継続されている。当初は農協に働きかけたが、難しいと断られた。現在は、農協、全農、県、市、農研機構も関与している。高収量飼料用米の種子は、他県へも販売しているが、他県からも圃場視察に参加するようになった。今では、圃場視察会の当日には、朝 06:30 に出発し、19:30 まで 220 km を走って、県内に散在する圃場を見て回るイベントとなっている。この圃場視察会は、秋川牧園の飼料用米プロジェクトが成功した力ギとなっている。

秋川牧園では、独自に生産者会議多収穫表彰を行っており、2016 年以降、毎年のように多収日本一コンテストで受賞するようになった。近年のコメ問題で、県北部のコシヒカリ産地でコメの単価が高騰し、マスコミであおられた結果、令和 7 年度の飼料用米作付面積は令和 6 年の 179 ha に対し、171 ha へ減少した。

飼料用米種子生産は、北陸 193 号の種子が不足したことから、2010 年から開始し、種子を安く販売するネットワークをつくった。2012 年からは種子を外販するようになり、多収日本一コンテストの受賞で注目されたことから、外部視察依頼が増え、情報が拡散し、種子の外販先も増加した。種子の外販先の増に伴い、鶏糞堆肥の外販へも波及し、島根県に鶏糞堆肥を出すようになった。

都会の消費者は食料が豊かだが、輸入食料に頼っているのが現状である。地方では農業者は減少し、国産農産物も十分に届いていないので、耕畜連携に消費者を巻き込み、消耕畜連携を目指し、食料安全保障に貢献すべきである。

飼料用米の多収量品種は、当初は真の多収性があったわけではない。食用米と収量に大差がなく、県知事が認めれば認定されるものであった。コンタミも多かった。多収量品種は更新を進めるべきであり、多様なニーズに合った多収量品種の育成が必要である。

飼料用米が作付けられた全国水田 10 万 ha は、食料自給率の向上よりも、食料自給力の維持に貢献した。飼料用米作付けで水田を水田として活かすことにより、コメ問題による令和 7 年度の食用米の作付け増に対応できた。国の政策で、転作作物として子実トウモロコシが奨励されたが、水田では収量があがらなかった。台風で倒れ、害虫の被害を受け、草丈が高いため中山間ではクマが隠れた。

秋川牧園の堆肥は、2009年以前では飼料用米に95%利用され、残りは直営のゆめファームで有機野菜生産に使用していた。2025年では、飼料用米への利用割合は78%へ減少し、ゆめファーム11%、外販11%となっている。ゆめファームでは、各圃場が標高差300mに分布していることを利用して、50品目の野菜を鶏ふん堆肥のみで生産し、追肥も行っていない。これからはホップを作り、ビール製造したいと考えている。野菜作りには若い人が参加し、現在25名で運営している。

ゆめファームは、当初、村田一人でやっていた。平場ではドリフトで農薬がかかるため、中山間地に農地を求めた。中山間地の農地の管理は大変で、水路の清掃なども人が集まらなかった。ゆめファームで、スタッフを5～6名連れて行くと、水路の維持管理などを行うので地元から喜ばれ、水田はすべて貸してくれた。ゆめファームの堆肥舎から、堆肥を農地に散布するので、資源の地域循環ができている。

消費者という実需者の理解を得て味方になってもらい、消・耕・畜連携を図り、自給率ではなく自給力を向上させたい。

畜産農家は堆肥作りを耕種農家の立場で行うべきである。結果が良ければ堆肥を継続的に使ってくれる。農家には堆肥ではなく、原料をもらったと思ってもらうことが重要である。このためには農家に堆肥舎が必要なので、行政の支援をお願いしたい。農地は鶏ふん堆肥だけで変わっていく。初年度は結果が出ないかもしれないが、何年か経つと確実によくなっていく。

高収量食料用米品種であるオオナリ、北陸193号は誰が作ってもモミ米1,000kgがとれる。茎や葉の養分が実際に集まるので、適期に刈取するのが重要である。北陸193号は最強収量を出すが茎の頑丈さが課題なので、クボタには飼料用米向けのコンバインを開発するよう提案している。

水田を畠地に転換するのではなく、水田としてコメを作らせて欲しい。飼料用米づくりはコメ作りである。2050年には農地は半減すると言われる。農家数も2020年以降7割近く減少する。秋川牧園は会社として、農地を減らさない、農家を減らさない取り組みをしているが、もともとは飼料用米への取り組みが始まりである。

農地集積では採算に合わない農地が残される。1～2ha規模の家族農業を残してほしい。新規就農にはコンバイン、トラクター、農舎などで1.5千万～2千万円が必要となるので支援が必要である。危機を乗り越えるためには、多収品種、多収技術の確立が重要である。



今日のポイント

- ①秋川牧園について
 - ②飼料用米の取組みについて
 - ③飼料用米の取組みがもたらしたもの
 - ④秋川牧園の紹介
 - ⑤飼料用米の沿革・概要
 - ⑥①飼料用米が16年間守ってきた約10万ha(2024年)の水田
⑦補助選択より耕種一体化！
⑧逃飛の輪に消費者が加わること、そして消滅畜逃飛へ
⑨良好な地域循環とは
⑩多くの品種と収穫技術～コストを落としてたくさんさんりんを販売するまで
⑪飼料用米生産者グループの現状とこれから(秋川牧園と生産者の紹介)
⑫2050年に半減する予定の農地、生産者・中山間をどう守るか
(食糧「自給率」よ「自給力」)
⑬秋川牧園としてできること、やるべきこと、目指すべき農業の未来



鶏肉・鶏卵事業の推進と課題

推進

- 主力である冷凍加工食品の増産
 - 平伺いたまごは鶏糞の増設し安定供給を図る
 - 国産豚肉自給率のUP→飼料用米増産(多収品種と多収技術の普及)
 - 農場のIT化(エサ残り測定装置など)、ペーパーレス化で農場の負担軽減
 - 農場の加工・検査機能を充実



今以上に食の価値を高める努力。
地域環境、サステナブルな生産を目指して。
そしてそこに消費者の共感を！

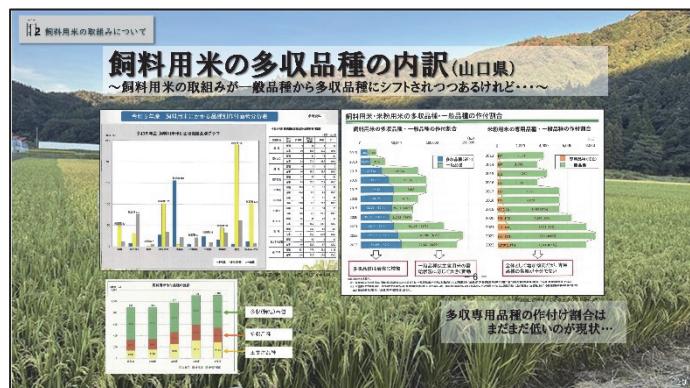
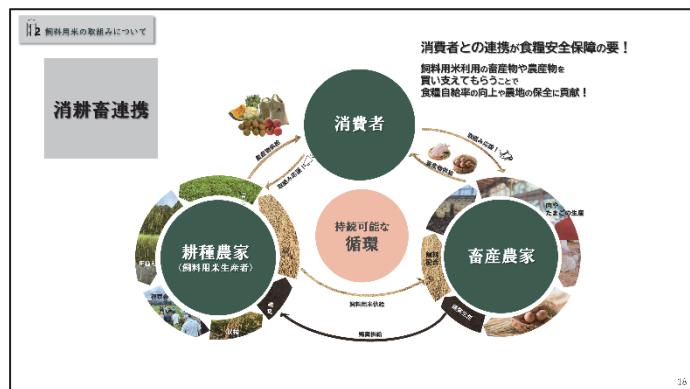


年	平均収量 (kg/ha)
H26	643.6
H27	583.7
H28	751.1
H29	905.7
H30	759.4
R1	649.6
R2	582.9
R3	703.1
R4	715.8
R5	740.1
R6	709.7
R7	771.0



生産者同士のネットワークの拡大
~種子外販先と新たなコミュニティの確立をめざして~

年	取扱件数
平成22年	7,234件
平成23年	7,209件
平成24年	6,456件
平成25年	11,066件
平成26年	12,295件
平成27年	11,158件
平成28年	18,873件
平成29年	18,761件
平成30年	19,779件
平成31年	18,388件



4

①10万ha(2024年産)の農地とそれに携わる農業者を守ってきた飼料用米

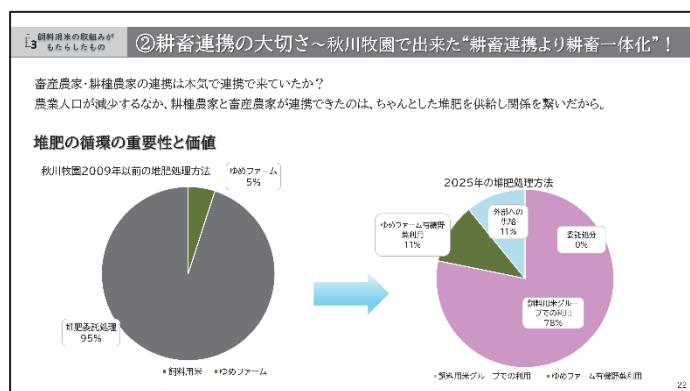
飼料用米が守ってきた水田**10万ha**は、(2022年14.2万ha、2025年4.93万ha)
食糧自給率の向上よりも、食糧自給力の維持に貢献！

飼料自給率と食糧自給力

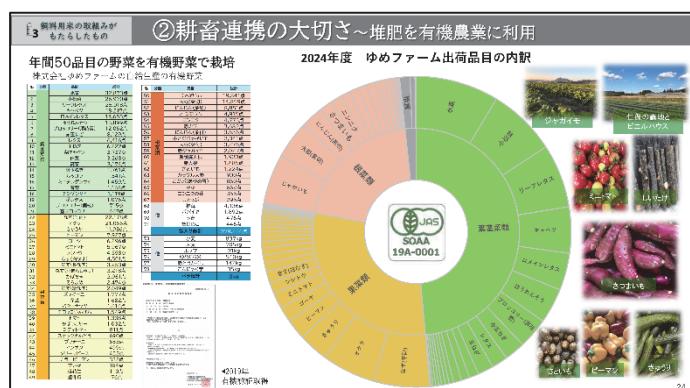
- し国内の農林水産業が持つ食料を生産する潜在的な能力
- 国内の畜舎地や労働力を最大限に活用した場合に
- 日本人一人あたりがどれだけのカロリーを摂取できるかを計算したもの

食の多様化により、輸入が増加しコメの消費量が低下した
このことにより米の消費が落ち、耕作放棄地や農業者離れが加速し、
現在の自給率の低下につながった
これからおいしいから米を食べようという 米中心の日本食を取り戻す!
美味しいがゆえに輸出もできる!!





4



②耕畜連携の大切さ～ゆめファーム果たす役割(社内・社外)			
ゆめファームの地域における役割			
<ul style="list-style-type: none"> ・中山間地への人手不足への消滅、耕作放棄地の有効利用 ・中山間地で飼育される農業法人に成長 ・秋葉会員による中山間農業への参入 有機農業は好都合な中山間農地 			
ゆめファームの果たす役割(社内と社外)			
<p>(社内)…種苗の有効利用 地肥の運搬処理 種選別→利活用した豆の貯蔵 分行肥料の造営 設施→かみゆめファームの運営 ゆめファーム連携会員ら自ら販路以降各駅や市や有機栽培農家の販路へ販促、 畜インフラ整備に対する応援、寄付によっては石垣敷布(冬季)</p>			
耕作放棄地	ルーラーで地盤処理	(社外)…農地の管理面に協力する 草刈り作業(農地整備)	
種苗繁育	マニュアルハッチャー		
水路の維持管理		水路の維持管理	
畜齢の見守り		畜齢の見守り	
農地の維持管理		農地の維持管理	
畜の健康状態		畜の健康状態	
畜の行動監視		畜の行動監視	
畜の疫病監視		畜の疫病監視	
畜の繁殖監視		畜の繁殖監視	
畜の死後処理		畜の死後処理	
畜の死後処理		畜の死後処理	
畜の死後処理		畜の死後処理	
畜の死後処理		畜の死後処理	
畜の死後処理		畜の死後処理	
畜の死後処理		畜の死後処理	
畜の死後処理		畜の死後処理	
畜の死後処理		畜の死後処理	
畜の死後処理		畜の死後処理	
畜の死後処理		畜の死後処理	
畜の死後処理		畜の死後処理	
畜の死後処理		畜の死後処理	
畜の死後処理		畜の死後処理	
畜の死後処理		畜の死後処理	
畜の死後処理		畜の死後処理	
畜の死後処理		畜の死後処理	
畜の死後処理		畜の死後処理	
畜の死後処理		畜の死後処理	
畜の死後処理		畜の死後処理	
畜の死後処理		畜の死後処理	
畜の死後処理		畜の死後処理	
畜の死後処理		畜の死後処理	
畜の死後処理		畜の死後処理	
畜の死後処理		畜の死後処理	
畜の死後処理		畜の死後処理	
畜の死後処理		畜の死後処理	
畜の死後処理		畜の死後処理	
畜の死後処理		畜の死後処理	
畜の死後処理		畜の死後処理	
畜の死後処理		畜の死後処理	
畜の死後処理		畜の死後処理	
畜の死後処理		畜の死後処理	
畜の死後処理		畜の死後処理	
畜の死後処理		畜の死後処理	
畜の死後処理		畜の死後処理	
畜の死後処理		畜の死後処理	
畜の死後処理		畜の死後処理	
畜の死後処理		畜の死後処理	
畜の死後処理		畜の死後処理	
畜の死後処理		畜の死後処理	

③消費者を味方にして、耕畜連携+消費者=消耕畜連携
～実需者の理解を得て味方に～

耕畜連携に加わるべき消費者の存在 → 消耕畜連携より消耕畜一体化

全ての取組みは消費者のために…食糧自給力向上のための生産力確保

→ 農業を増やし農地の荒廃から守る！

ゆめファームの中山間有機農業と水稻の多収品種と多収技術によるお米の生産は食糧安全保障において重要な役割を果たす！

秋川牧園
全てをコントロールし
地域とのかかわり方を標準化・進める
新しい価値と農業の未来が開ける

ゆめファーム
中山間における
有機農業の取組み
農業を守り、
広い水田のインフラを守る！

自給力の向上

多収品種を利用した食用米作りと飼料用米
単収向上、水田を維持
畜農業の核となる取組み
WCS（ワーコロナ）を通じて
誰でも安心・簡単にご利用できる
大規模化の必要なし！

⑥多収品種と多収技術

オオナリと北陸193号（現在の最多収品種）

左：オオナリ 右：北陸193号

誰が作っても1000kgとなるお米

豊穣収量を獲得するお米
茎の頸丈さが課題

⑤多収品種と多収技術へコストを落としてたくさん作ること
秋川牧園の年次別品種割合の移り変わり

年度	秋川	赤いねは	みなかから	ホシアキバ	ミツユラン	クロスル	ひよし	さくらんぼ	おおのなづ
H23	100.0%	7.0%	1.0%	1.0%	1.0%	1.0%	1.0%	1.0%	1.0%
H24	100.0%	13.0%	7.0%	1.0%	1.0%	1.0%	1.0%	1.0%	1.0%
H25	100.0%	23.0%	7.0%	8.0%	1.0%	1.0%	1.0%	1.0%	1.0%
H26	100.0%	15.3%	7.0%	19.7%	1.0%	1.0%	1.0%	1.0%	1.0%
H27	100.0%	15.3%	7.0%	19.7%	1.0%	1.0%	1.0%	1.0%	1.0%
H28	100.0%	23.0%	7.0%	15.3%	1.0%	1.0%	1.0%	1.0%	1.0%
H29	100.0%	23.0%	7.0%	15.3%	1.0%	1.0%	1.0%	1.0%	1.0%
H30	100.0%	23.0%	7.0%	15.3%	1.0%	1.0%	1.0%	1.0%	1.0%
R1	100.0%	23.0%	7.0%	15.3%	1.0%	1.0%	1.0%	1.0%	1.0%
R2	100.0%	23.0%	7.0%	15.3%	1.0%	1.0%	1.0%	1.0%	1.0%
R3	100.0%	23.0%	7.0%	15.3%	1.0%	1.0%	1.0%	1.0%	1.0%
R4	100.0%	23.0%	7.0%	15.3%	1.0%	1.0%	1.0%	1.0%	1.0%
R5	100.0%	23.0%	7.0%	15.3%	1.0%	1.0%	1.0%	1.0%	1.0%
R6	100.0%	23.0%	7.0%	15.3%	1.0%	1.0%	1.0%	1.0%	1.0%
R7	100.0%	23.0%	7.0%	15.3%	1.0%	1.0%	1.0%	1.0%	1.0%

⑤多収品種と多収技術へコストを落としてたくさん作ること 飼料用米専用品種のメリット・デメリット～秋川園農生産者の主張 実際に栽培してみて気づいたこと～			
品目	メリット	デメリット	改善点や気づき
モニロマン	・多収 ・倒伏性に強い	・通常栽培適性あり ・不稔率が高く(標の利用に難)	・発芽よくするために、不稔率の改善を
北陸193号	・多収 ・秋川グレーブで栽培多収 ・足立(1000kg播種)も可 ・倒伏性に強い	・特有の耐倒伏性なく、水害時に倒伏が必須 ・特有の耐倒伏性なく、水害時に倒伏が必須 ・ここ数年は倒伏が少くない(なぜなら) ・ウカツ・耐倒伏性の育成 ・倒伏性が良 ・茎が太く(長い)点、コンパクションへの負担大!	・ウカツ・耐倒伏性の組み合せを ・耐倒伏の改善を ・いもうと栽培方法の選択点の検討点の 検み合わせを
みなかから	・やや多収 ・倒伏・耐倒伏性が少し ・葉:上部葉はやや倒伏する ・茎:倒伏しない ・中・土:疊生(ひびき)19.3kg/25L ・発芽率:草(直播)も高め	・一部倒伏の危険性 ・放牧適性、ブランケット栽培にも適 ・不稔(一部)有	・ゴマ葉茎に落葉や取れ根に については改善が必要 ・不稔率の改善
夢あおば	・平生:栽培では空茎生が無い ・山口県北部等二地区地では 茎みわらひよい ・葉:倒伏性	・多稔自然に良い ・ここ数年、倒伏によつては いもうと栽培(傾かず)	・いもうと栽培技術選定の 組み合わせを検討 ・多稔性の育成 (葉茎は直播1700~2000kg/kg)
オオナリ	・多収 ・中生(生长期も早い) ・山口:倒伏・黒頭病が茎はまるとなるから要注意や (ソシノリ:茎はま)	・特有の耐倒伏性と、黒頭病防除対策が必須 ・耐倒伏性の空茎生	・まだ、秋川グレーブでは大苗直での取り組みが 少なく今後拡大して検討する

⑤多収品種と多収技術～コストを落としてたくさん作り反収1トン取りをめざすこと
～多収にこだわり続けた16年～秋川牧園の品種改良の取組み

飼料用米専用品種について
まずは**絶対多収**であること。

多収でなければ意味がない→反収:1000玄米kg以上

さらに早生・晚成の2系統 加えて**耐虫性・耐病性**
(ウンカ・イモチ病)

地域別適合品種の選定

飼料用米で培ったノウハウをいいずれは食糧にも生かす！

農研機構との15年を超える連携(これからの米作りのために)
ずっと目指してきた多収品種・多収技術が
令和の米不足・食料安全確保の議論の中で生かされることで…!
目標指してきた、未来が見えてきた！！

⑥飼料用米生産者グループの現状とこれから
～飼料用米生産者が訴えたかった事 秋川牧園と農業者とのきずな

水田は水田。畑地にするには無理がある。

水田に最も適した米を作らせてほしい！

飼料用米づくりは米作り、
日本の農地を守り原風景である田舎を守る！

このことをずっと訴えてきた

令和の米不足を経て、やっと国は米の増産に舵を切ると決めた

これから先の重要なこと

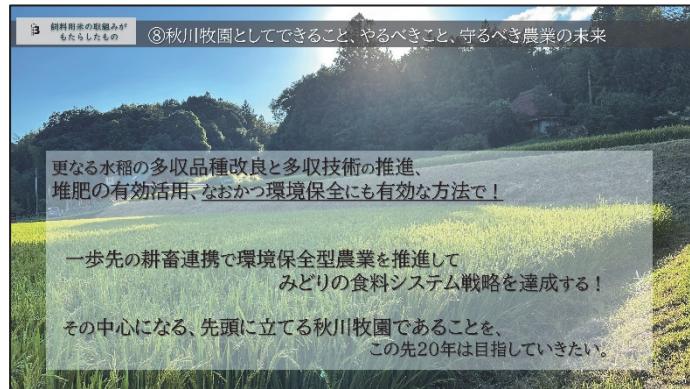
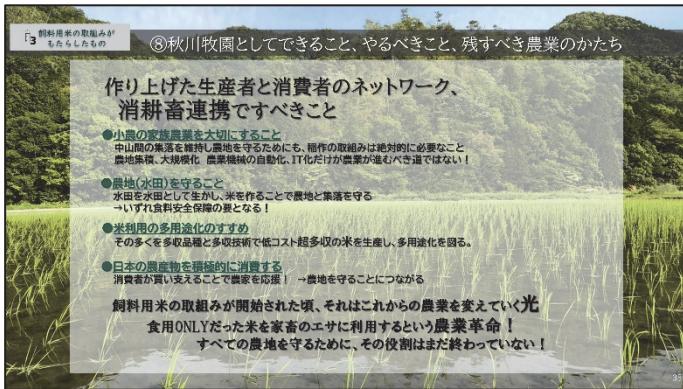
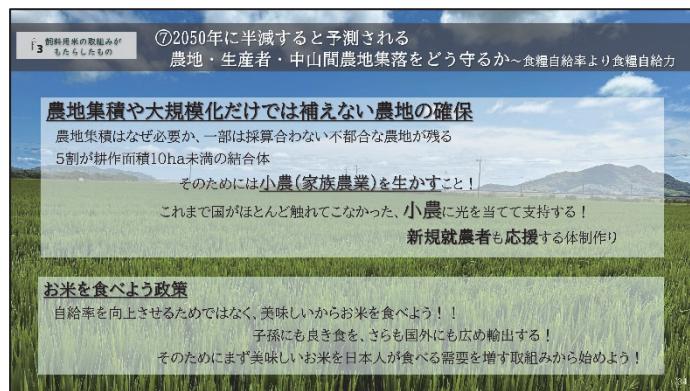
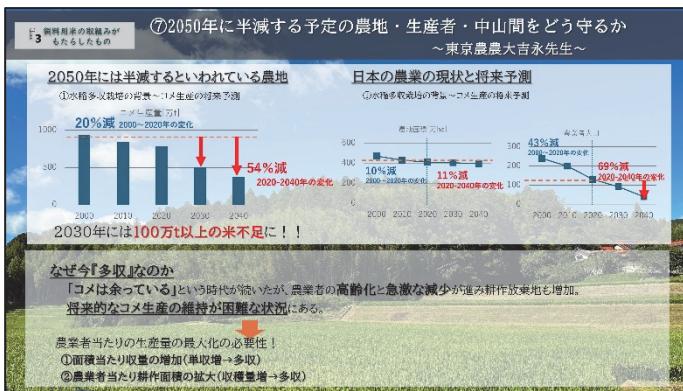
年々低下する自給力

農地の確保と生産者の確保には限界がある。

それを補つのが、米の多収品種と多収検技術！

～これまで飼料用米多収日本一コンテスト表彰受賞の実績がヒミツとなる。

5年前～10年前の生産者
飼料需がいる、35
現状で維持が問題
になる、50



第三部 意見交換 「会場の皆さんとの意見交換」

司会 引地和明氏（全日本配合飼料価格畜産安定基金 常務理事）

第三部の意見交換を始めます。事例発表に対して何か質問、ご自身の経験からご意見等をいただければと思います。

藤井照雄氏（山口県（有）萩見蘭牧場 取締役）

高崎さんは堆肥の一部を輸出しておられるが、①あえて輸出するのはなぜか、②輸出品という商品にする場合の国・行政の対応はいかがか、③畜産 DXによる肥育成績の向上に向けどのように取り組み、どのような成果があったのか、伺いたい。



高崎淳史氏（鹿児島県（株）高崎畜産）

堆肥の取り扱いに困っていたところ、飼料会社から輸出してはどうかと提案された。このため価格はゼロ円にして、フレコンで 100 トンを輸出した。ゼロ円としても、人件費、フレコンバッグ代、輸送費などがかかるので持ち出しである。輸出の話があった時、社内で検討し、輸出で堆肥をはけるならやってみようとなった。現在、今年の 6 月から毎月 100 トン、ラオス、カンボジアなどに輸出している。U-motion の導入による肥育成績としては、病気、横臥の早期発見による効果がある。夜間の監視人をつけており、横臥などの異常を確認している。スマホの情報は誰が見ても分かるので、対応しやすい。現在、脂肪腫が懸念されており、病気の早期発見は重要である。U-motion のセンサーで餌の摂取量が落ちたところで出荷できることも有利である。首掛け式のセンサーだったが、今年から耳標式センサーを入れる予定である。

瀬ノ口武氏（鹿児島県（株）ジャパンファーム）

江夏商事の原園さんへの質問で、補鳥コンテナの導入によって作業している人の負担はどの程度軽減したのか。



原園和洋氏（宮崎県江夏商事（株））

カゴは小さな中に入れていかないといけないということと、そのカゴを移動させないといけないということが捕鳥の方には負担になっていたのですが、コンテナに移行したことで補鳥に関しては変わってないが、その代わりその後の移動とか積み下ろしが不要になって負担が減ったと思います。

花田 広氏（宮崎県 配合飼料価格安定基金協会 理事長）

高崎畜産さんへの質問で、宮崎県は400万トンぐらい家畜排泄物が出ます、これをどう処理していくかが課題です。農地は6万ヘクタールということで非常に狭いものですから、いろいろと検討してきましたが、現在は堆肥を5,000トン程度県外に出している状況ですが、なかなか海外まで輸出しようということになっておりませんでした。詳しい話を聞きしたいと考えております。



秋川牧園の村田さんの講演で、非常に今日私が勉強になったのは、我々は減反政策とあわせて、WCSで7,000ヘクタールまできましたが、飼料用米は今減ってきて数百haになっているような状況です。本日、先生がおっしゃったように、WCS、飼料用米を作る政策によって農地が守られてきた。だから、今、米作を増産体制に移れと言われても、すぐに対応できるということが無駄じゃなかった。非常に大きな成果だということをいろいろな場面でこういう言い方をすればいいんだなということで非常に勉強になりました。

江夏商事の原園さんへの質問で、宮崎県は鹿児島に次ぐプロイラー県でございます。7~8年前になるのですが、捕鳥班が夜中、移動中に事故にあいまして慌てたことがございまして、それ以降、捕鳥機をなんとかしなければということで要望等をやってきました。

独自に入れればいいのでしょうかけれども、国の補助なりがないと、これはなかなか進まないというようなことで、国の方へも働きかけをしたのですけれども、なかなか実現しませんでした。今回、国の方の感触というのがどんなものか、教えていただければと思います。よろしくお願ひします。

原園和洋氏（宮崎県 江夏商事(株)）

捕鳥機を入れるための補助金がないか検討した。県へ対象補助金を確認したが、実績がないと無理とのことであった。直接の補助金はなかったが別の補助事業があったので、申請している。導入実績ができれば、業界の皆さんも補助を得て導入しやすくなると期待している。

村田 洋氏（山口県 (株)秋川牧園）

飼料用米が来年どうなるか分からないが、コメが作られるのであればよい。16年前、コメは神聖であり、家畜の餌にすることに抵抗があった。しかし飼料用米によって水田を守ったのは事実である。需要動向によって生産は変わるが、今は食用米生産の機運が高まっている。

高崎淳史氏（鹿児島県 (株)高崎畜産）

日産10トンの堆肥処理が可能な機械があり、これを入れれば堆肥を撒く農地を減らせる。10台入れれば一日100トン処理できると社内では言っている。堆肥の処理に困れば輸出する方法がある。堆肥処理機を入れる補助事業があればありがたい。

松原英治（全日畜専門員）

家畜飼養戸数の減少が止まらず、高齢化が進んでいるが、日本の畜産を担う大畜産県の鹿児島県として、5年後、10年後の県の畜産のビジョンをどのように想定されておられるのか。村田さんのおっしゃる消耕畜連携の確立は究極の地域資源管理と思う。秋川牧園さんの取り組みを広げるには、取引先の拡大や研修会などが必要と思う。多収量品種の種子や堆肥の販売で、関東にまで取引先が広がっているが、今回の資料をもとに、村田さんだけではなく、若い社員にも研修会や講演会などで、積極的に秋川牧園の取り組みを伝えていただきたい。秋川牧園イズムといった形で、消耕畜連携が広がれば、行政も取り上げ、取り組みがより一層広がると思う。原園さんの捕鳥機について、捕鳥コンテナを含め外国の機械だが、需要に比して開発費が大きいので販売価格は高額となり、スペアパーツの確保、運営なども高額になると思う。このことにどう対応されているのか。また、このような高額の機材であれば、費用対効果は低いと思うが、それでも捕鳥コンテナ、フォークリフトの改良、捕鳥機の導入など高額投資を決断されたのは、どのような事情があったのか。江夏商事さんの100年企業としてのノウハウがあるのか。



村田 洋氏（山口県（株）秋川牧園）

現会長からは、いくら内容が良くても熱意がないと伝わらないと言われてきた。鶏糞堆肥の利用方法として、飼料用米に熱中させてくれた会長がすばらしかった。1972年から有機農業に取り組み、野菜をつくってきた。農業の現場では、土日もなく、炎天下で水やりしたり、苦労して育てても、価格に反映しない。これでいいのかと思ってきた。飼料用米を進めながら、農業の未来にきっかけが見つかり、関係者から共感され、続けることができている。

原園和洋氏（宮崎県 江夏商事（株））

捕鳥用の機械はイタリア製で、コンテナ捕鳥のフォークリフトは専用のフォークリフトである。パーツもイタリアから取り寄せる。伊藤忠マシンテクノスがC M C社の日本の総代理店となった。機械のメンテもメーカーにやってもらう。機械の導入時、技術者をイタリアに派遣して、技術を習得させる予定である。コンテナ捕鳥の導入に当たり、社長の岩崎が必要かどうか判断した。捕鳥作業を行う人がいないので経営が立ち止まっているなら、やるしかないという判断だった。自分たちが必要と判断すれば他社動向に関係なく取り組む姿勢で経営している。

岩田英稔氏（鹿児島県北薩地域振興局）



5年後、10年後のビジョンについて、国の酪農・肉用牛生産近代化計画、家畜改良増殖目標などに従って県の計画が立てられ、ビジョンが出来上がっていく。個人的な意見として、畜産は県としてもなくてはならない産業であり、

大規模化、新規就農の支援、海外を含めた需要の拡大を進め、やめていく農家と歩調が合わないかもしれないが、可能な限り維持していくことに努めると思う。

司会 引地和明氏（全日本配合飼料価格畜産安定基金）

このシンポジウムの事業を推進する上で 3 名の推進委員に出席いただいておりますので、今日のシンポジウムについての感想など、お話をいただければと思います。まず、千葉県で実際に養豚経営をされております清和畜産の早川さんからお願ひいたします。

早川結子氏（推進委員 畜産経営者）

今日は発表者の皆様方、大変貴重なお話をありがとうございました。

実家は畜産とは関係ないが、動物が好きで獣医を目指し、千葉県で養豚経営を行っている。飼料を輸入に頼り、規模拡大、スマート化を進めてきた。



鹿児島県は畜産ビジネスのスケールが大きいので驚いた。経営が 6 次産業

化されている。DX、AW を目的とすると、費用割れを起こすが、自身の経営のためという目的であれば意義がある。3 名の発表者の畜産生産と 3 次産業化、村田さんの飼料用米の重要性といったお話から、畜産を総合産業として位置付けられることができた。捕鳥機についても、日本でも製作できるのではないか。畜産に光が見えたことがありがたい。

三宅俊三氏（推進委員 山口県配合飼料価格安定基金協会 常務理事）

高崎畜産さんの 7 千頭での U-motion の使用について、これだけの規模で



DX 技術を導入すればどれだけ効率化が進み、効果的か驚かされた。大規模

畜産が大規模な耕種農業を行うという今までにない畜産の方向性が示された。

江夏商事さんの捕鳥機の取り組みだが、私も捕鳥をやったことがあります。

大変な作業である。しかも労働力がなくなり、食鳥経営のボトルネックとなる現状で、全国の食鳥経営においても大きな取り組みといえる。秋川牧園さんは、資源循環というキーワードで消耕畜連携に取り組まれているが、まさに循環の根幹に当たる。ぜひこの取り組みを全国に広めていただきたい。

川村治朗氏（推進委員 千葉県配合飼料価格安定基金協会 常務理事）

高崎畜産さんの U-motion による牛群管理は、牛にも優しい DX で、データ



見える化しており、すばらしい取り組みである。江夏商事さんの捕鳥機の導入につき、その投資判断の行動力に感心した。秋川牧園さんは、千葉県の

講演会に来ていただき、講演していただいた。資源の地域循環において、畜産農家、耕種農家の活動に、消費者を巻き込むことの重要性を改めて知らされた。

◎モデレーターから

司会 引地和明氏（全日本配合飼料価格畜産安定基金）

SDGs とか、DX とか、新しい言葉がいっぱい、世の中にキーワードが出てくるわけです。畜産におけるという冠について、そしてどうするこうするということで、まさに今日お三方、県庁の方も含めて、それを現場で実践されておるわけです。私もこの世界に長いんですけれども、こういうものを外から、消費者の方から見ると、畜産というのは、堆肥の問題も含めて加害者みたいな見方をどうしてもされがちだし、アニマルウェルフェアにしても、まさにそういうことだと思います。決してそういう思いはないのですが、それを解決しようと皆さん頑張っているということで、今日のお話を聞いて、具体的にその解決の糸口を見いだそうということで、それぞれの地域で頑張っているということは、関係者みんなで共有すべきであるし、私たち、こうした団体もそれを強く発信していくお手伝いをしていくことが重要だと改めて感じました。

◎閉会挨拶

隅 明憲（全日畜理事（有）鹿野ファーム代表取締役）

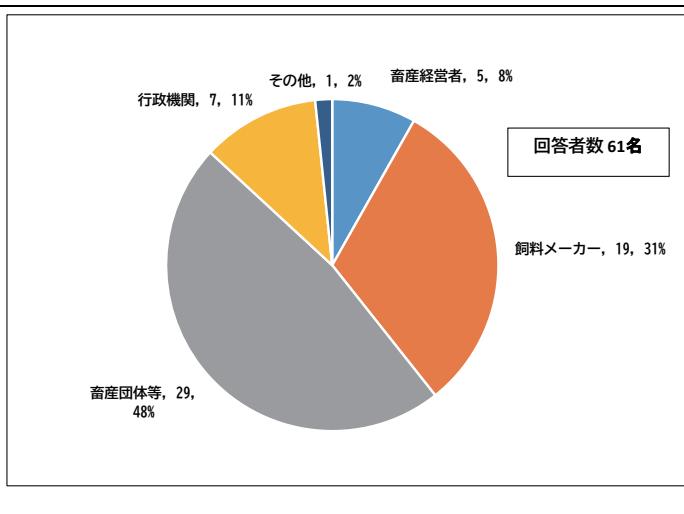
本日のワークショップでは長時間にわたりお付き合いいただきまして、誠にありがとうございました。また、事例発表で御登壇いただいた皆様には、本当に参考になるすばらしいお話を聞かせていただきまして、誠にありがとうございました。DX やアニマルウェルフェアという切り口からのお話ではありましたけれども、経営理念の根幹に関わるようなお話を伺えたなという気がいたしました。



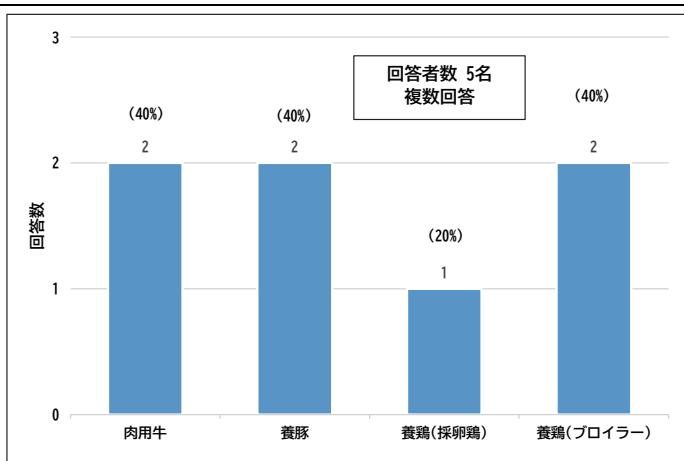
畜産に携わる者は様々な課題や問題を抱えておりますけれども、その問題について、たじろいで歩みを止めてしまう者と、そこに立ち向かって新しいチャレンジをされている方々の差というのも強く感じました。大変刺激を受けることができました。今日は本当にありがとうございました。

以上

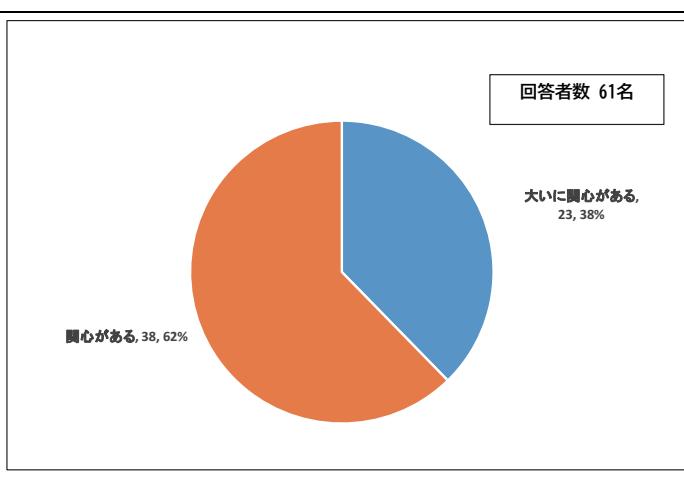


問1 回答者の属性

回答者の属性は、「畜産団体等」が48%、「飼料メーカー」が31%、「行政機関」が11%、「畜産経営者」が8%であった。また、「その他」の回答が1名、2%あり、具体的には「民間会社」であった。

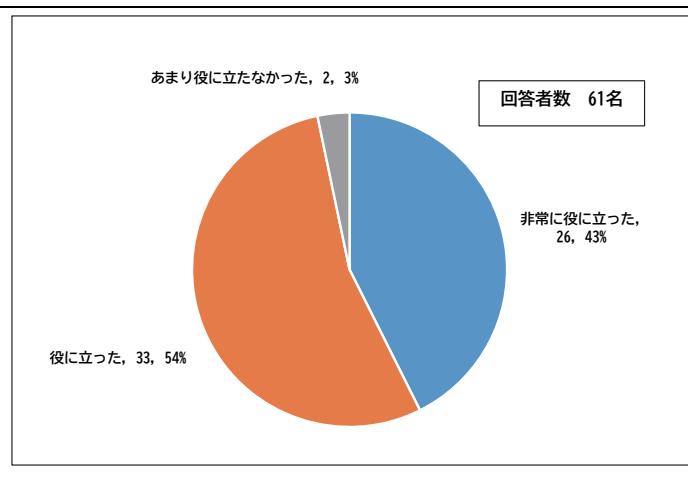
問2 畜産経営の「畜種」

前問で、「畜産経営者」と回答した者5名の「畜種」については、「肉用牛」、「養豚」及び「養鶏(ブロイラー)」が40%、「養鶏(採卵鶏)」が20%であった。この内、「肉用牛・養豚」、「養鶏(採卵鶏)・養鶏(ブロイラー)」の畜種複合経営が1名ずつあった。

問3 「畜産 DX とアニマルウェルフェアで開く経営の未来」の関心度合い

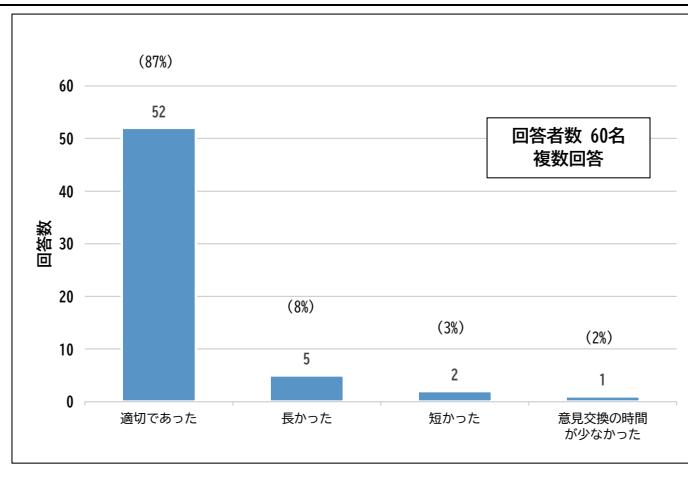
ワークショップのテーマである「畜産 DX とアニマルウェルフェアで開く経営の未来」への関心度合いは、「大いに関心がある」が38%、「関心がある」が62%と、回答者全員の関心が高かった。

問4 本日のワークショップは役に立ったか



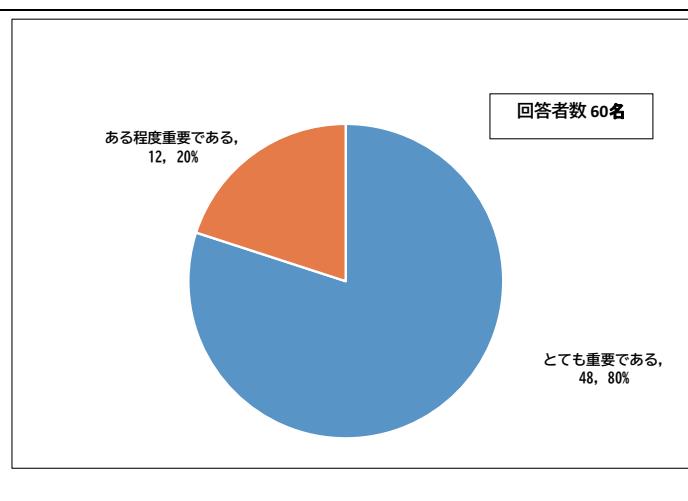
ワークショップが役に立ったかについては、「非常に役に立った」が 43%、「役に立った」が 54%と大多数の回答者が肯定的な回答をしている。他方、「あまり役に立たなかった」とする回答が 3%あった。

問5 時間配分について



時間配分については、「適切であった」が 87%であった。そのほか、「長かった」が 8%、逆に、「短かった」が 3%、「意見交換の時間が少なかった」が 2%あった。

問6 「畜産経営の持続可能な開発目標対応調査事業」は重要と考えるか



「畜産経営の持続可能な開発目標対応調査事業」は重要と考えるかという問に対しては、「とても重要である」が 80%、「ある程度重要である」が 20%と、回答者全員が肯定的な回答をしている。

問7（自由意見）

- ✓捕鳥作業の自動化とアニマルウェルフェアでビデオ映像があったが、その映像を閲覧できるとありがたい。コンテナの導入に至って工場の製造ラインの変更はどんなことがあったのか？どの位の期間あったのか？どの位の金額がかかったのか？が気になった。労働人口の減少や後継者の減少の話が出るので若手の社員へも聞いてほしい内容だった。
- ✓捕鳥機の導入について、先駆者として勇気ある取り組みに感動した。先端を進む人の話は大変勉強となる。
- ✓江夏商事のコンテナ捕鳥を詳しく聞きたかった。カゴ→コンテナへの移行で農場で何をしたかなど。
- ✓演題テーマも大きな事業であり、刺激を受けるものであった。一方で、装置産業でもあり、今後の補助事業についても詳しく調べたい。
- ✓アニマルウェルフェアの風景(7Pのコンテナ)の現場見学が可能か？これから時代は、必ず必要になるシステムと思う。
- ✓飼料米が水田を守ってきたという視点に気づかされた。
- ✓畜産業における人手不足問題解決と労働環境改善において、畜産DX技術の導入はとても意義のあることだと思った。そして、さらにアニマルウェルフェアにも配慮した生産システムの構築にもつながるのではないかと思った。秋川牧園の発表の中にあった「食糧自給率より食糧自給力」、「消耕畜連携」というフレーズがとても印象に残った。
- ✓テーマと直接関係はないが、現場では人材・人員不足は今後ますます大きな問題になると思う。国内での人員確保への対策も重要だが、海外からの人員確保も継続されるため、この関係の問題点等の話題も取り上げてみてはどうかと思う。
- ✓畜産DX、アニマルウェルフェアに取り組むにあたり、初期投資が必要になることが多いが、その点については行政の補助なども必要であると感じた。
- ✓DXの普及を図るために販売する者が生産者に寄り添うことが大事。売るだけでなく、使えるようになるまで、見捨てないことも大切と思う。
- ✓配合飼料価格安定基金制度の制度設計の見直し。マルキン制度の和牛や交雑のコスト計算の見直し。
- ✓非常に勉強になった。
- ✓早く退職して、米作りを始めよう!!
- ✓食糧安全保障は国の根幹。そこを支えている生産者に手厚い支援をして欲しいと考える。次回は、農水省、財務省、経産省の人を招いて、食糧安全保障について議論してほしい。
- ✓ありがとうございました。このセミナーの話を色々な客に話をしてヒントを与えればと思う。
- ✓空調が効きすぎて寒かった。
- ✓意見交換会が間延びして良くなかった。感想の言い合いでしかなかった。

2025(令和7)年

9月5日

金曜日

旧暦7月14日
友引

日	月	火	水	木	金	土
31	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	1	2	3	4

さようの歴史
1991年



▶ 先住民条約発効

先住民の独自の文化、伝統、経済を維持することを尊重する「先住民および種族民に関する条約」が発効した。89年の国際労働機関総会で採択。先住民の人権や基本的自由の侵害を禁止し、開発に際しての雇用や職業訓練などを規定している。

南日本新聞社 営業所: 〒890-8603 鹿児島市与次郎1-9-33
☎ 099(813)
紙面の問い合わせは ひろば室5110(平日9時半~17時半)
報道5124 総合受付5001 販売5040 広告5083 事業5052

DXや動物福祉学ぶ

全日畜 東京は4日、鹿児島市



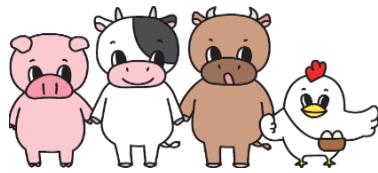
全日本畜産經營者協会
(全日本畜 東京は4日、鹿児島市)

畜産のデジタルトランスフォーメーション(DX)やアニマルウェルフェア(動物福祉)に関するワークショップを開催する。鹿児島市で開いた。県内外の畜産関係者ら約80人が参加。先進事例を学び、畜産経営の安定や発展に生かす方策を探った。事例紹介では、薩摩川内市で肉用牛を生産する高崎畜産の高崎淳史専務が登壇。牛の行動管理システムを導入した結果、繁殖牛は授精のタイミングが「見える化」され、分娩間隔短縮や繁殖成績向上につながったと説明し、「肥育牛の事故防止や従業員の管理作業軽減にもつながっている」と述べた。

畜産のデジタルトランスフォーメーション(DX)やアニマルウェルフェアを考えたワークショップが4日、鹿児島市(宮崎)は、家畜をストレスの少ない快適な環境で飼育するアニマルウェルフェアについて報告。出荷前の捕鳥作業の労力を減らす専用コンテナや運搬車の導入メリットを紹介した。

意見交換会もあり、参加者は「DXが肥育成績の向上にどの程度つながるのか」「海外製の捕鳥機導入に対する故障やメンテナンス面の不安はないのか」など、積極的な質問が飛び交った。(池端祐一郎)

「南日本新聞 2025年9月5日 朝刊 [7 [経済]]」



「全日畜」は畜種横断の畜産経営者の団体です

